

籠 燈 丹 牡

すから伴藏はオヤ此亞魔といひながら拳を上て頭を打つ打たれておみねは啼り立ち  
 沈聲を振立て(峯)何を打ちやアがるんだサア百兩の金をお呉私やア出て参りませう  
 お前は此車橋から出た人だから身寄もあるだらうが私は江戸生れで斯様な所へ引張  
 られて来て身寄手寄がないと思つていゝ氣に成て私が年をとつたもんだから女狂ひな  
 んぞはじめ今になつて見放されては喰方に困るから是だけ金をおくれ出て往きます  
 から(伴)出てゆくなら出てゆくが、が何も貴様に百兩の金を遣るといふ因縁がね  
 いやア(峯)大層なとをいゝでないヨ私が考へ付た事で幽霊から百兩の金を貰たの  
 じやないか(伴)コラ〜静にしね〜(峯)云たツて宜よそれから其金で取りついて斯  
 う成たのじやアないか夫ばかりじやアね〜萩原様を殺して海音如來のお像を盗み取  
 て清水の花壇の中へ埋めて置たじやアあいか(伴)静にしね〜眞成に氣違へたなア人  
 の耳へでも入たらどうする(峯)私やア縛られて首を切られてもいゝよそうするとお  
 前も其儘じやア置かないよ百兩お呉私やア別に成ませう(伴)仕様が無なじが悪るか  
 つた堪忍して呉そんなら是迄お前と一所になつては居たがおれに愛想が盡きたなら

籠 燈 丹 牡

此宅はすつかりとお前に遣てしまはアと云ふとおにか己があの女でも一所に連れて  
 何處かへ逃げでもすると思ふだらうが段々様子を聞けば彼の女は何か筋のわるい女  
 だそうだから最う好加減に切りあげる積り夫ども爰の家を二百兩にでも三百兩にで  
 もたゝき賣て仕舞てお前を一所に連れて越後の新潟わたりへ身を隠し最う一ト花咲か  
 せ巨豪やりてへと思ふんだがお前最う一度蹴足になつて苦勞をしてくれる氣はねへ  
 か(峯)私だつて無理に別れたいと云ふ譯でもなんでもありませんが今に成てお前が  
 私を邪見にするものだからそうは云たものゝ八年以來連添て居たものだからお前が  
 見捨てないと思ふ事なら何所までも一所に往こうじやアないか(伴)そんなら何も腹  
 を立てる事はねへのだこれから中直りに一盃飲んで兩人で一所に寝やうと云ひなが  
 らおみねの手首を取て引寄せる(峯)およしヨいやだよウ「川柳に女房の角をちんこ  
 でたゝ折りて」忽ち中も直りましたそれから翌日に伴藏がおみねに好む衣類を買  
 て遣るからといふので幸手へ参り呉服屋で反物を買ひ同驛の料理屋でも一盃遣て兩  
 人連れ立ち最う歸らうと幸手を出て土手へさしかゝるを伴藏が土手の下へ降に掛る





舊悪の暴露を  
恐れ伴藏女  
房を殺害す



斗巻



から(峯)旦那どこへ往(ゆ)の伴(伴) 實は江戸へ仕入に往(い)た時にわの海音如來の金無垢のお  
守りを持って来て此處へ埋めて置(お)いたのだから堀出さうと思(おも)つて来たんだ(峯) アラまア  
お前は夫れまで隠(かく)して私に云(い)はないのだヨそんなら早く人の目(め)つまにかゝらないう  
ちに堀(ほ)てお仕舞(し)舞(舞)ヨ(伴) これは堀(ほ)出して明日(あした)古河(ふるが)の旦那(だんな)に賣(う)るんだ何(なん)だか雨(あめ)がポッ  
ク降(ふ)て来たやうだな向(む)ふの渡(わた)し口(ぐち)の所(ところ)から何(なん)だか人が二人(ふたり)ばかり段々(だんだん)こちらの方(ほう)  
へ来るやうな塩梅(あんばい)だから見て居(ゐ)てくんなね(峯) 誰も来(き)やアしさいよどこへサ(伴) 向(む)  
ふの方(ほう)へ氣(き)を付(つ)けろといふ向(む)ふは往(わ)来(来)が三又(みつまた)にあつて居(ゐ)りまして側(かた)へは新(しん)利(り)根(ね)大(だい)利(り)  
根(ね)の流(なが)れて折(を)りしも空(そら)は曇(どん)ぼりど雨(あめ)模様(よう)幽(ゆう)かに見(み)ゆる田舎(いなか)家の盆(ぼん)燈(とう)籠(かご)の火(ひ)も既(い)や消(け)  
なんどし往(わ)来(来)も途(みち)絶(た)えて物(もの)凄(す)くかみねは何(なん)心(こころ)なく向(む)ふの方(ほう)へ目(め)をつけて居(ゐ)る油(あぶら)斷(た)を窺(うかが)  
ひ伴(伴)藏(ざう)は腰(こし)にさしたる銅(どう)鐵(てつ)造(ぞう)りの脇指(わきさし)を音(ね)のせぬやう引(ひ)くと抜(ぬ)き物(もの)をいはず背(うしろ)後(ご)か  
ら一生(いっせう)懸(けん)命(めい)力(りき)を入れておみねの肩(かた)先(まへ)目(め)がけて切(き)り込(こ)めばキヤツとおみねは倒(た)れおが  
ら伴(伴)藏(ざう)の裾(すそ)にしがみ付(つ)き(峯) それぢやアお前(まへ)は私(わたし)を殺(ころ)してお國(くに)を女(に)房(ぼう)に持(も)つ氣(き)だね  
(伴)知(し)れた事(こと)よ惚(ほ)れた女(をんな)を女(に)房(ぼう)に持(も)つのだ觀(く)念(ねん)しろと云(い)ひさま刀(かたな)を逆(さか)手に持(も)直し貝(かい)

売(う)骨(こつ)のあたりから乳(ち)の下(した)へかけしたゝかに突(つ)込(こ)んだればおみねは七(なな)顛(てん)八(はち)倒(た)の苦(くる)みをお  
し己(おの)れ其(その)儘(まま)にして置(お)うかど又(また)も裾(すそ)へしがみ付(つ)き伴(伴)藏(ざう)は乘(のり)掛(か)て止(と)めを刺(さ)したからおみね  
は息(いき)が絶(た)えましたかどうしてもしがみついた手(て)を放(はな)しませんから脇(わき)差(さ)にて一本(いっぽん)く  
指(ゆび)を切(き)り落(お)し漸(やう)やく刀(かたな)を拭(ぬぐ)ひ鞘(さや)に納(な)め跡(あと)をも見(み)ず飛(と)びが如(ごと)くに我(わが)家(か)に立(た)歸(かへ)り慌(あわ)たし  
く拳(こぶし)をあげて門(かど)の戸(と)を打(う)叩(たた)き(伴) 文(ぶん)助(すけ)一寸(いっすん)爰(こゝ)を明(あ)けてくれ(文) 旦那(だんな)でございますかへ  
い御(ご)歸(かへ)り遊(あそ)ばせと表(おもて)の戸(と)を開(ひ)く伴(伴)藏(ざう)もツと中(うち)に入り(伴) 文(ぶん)助(すけ)や大(だい)變(へん)だ今(いま)土(ど)手(て)で五(ご)人(にん)  
の追(お)剎(せ)が出(で)て己(おの)れの胸(むね)ぐらを掴(つか)まへたのを拂(はら)つて漸(やう)やく逃(に)げて来たがおみねは土(ど)手(て)  
へ降(お)りたから悪(わる)くすると怪(け)我(わ)をしたかおみねは知らないどうも案(あん)じられるどうか皆(みんな)お一所(いっしょ)  
に行(い)つて見(み)てくれといふので奉(ほう)公(こう)人(にん)一同(いっどう)大(だい)に驚(おどろ)き手(て)にくく半(はん)棒(ぼう)心(しん)張(はり)棒(ぼう)を携(たづ)ね伴(伴)藏(ざう)を  
先(ま)きに立(た)て土(ど)手(て)下(した)へ來(き)て見(み)れば無(む)残(ざん)やお峯(みね)は目(め)も當(あた)られぬやうに切(き)殺(ころ)されて居(ゐ)るか  
ら伴(伴)藏(ざう)は空(そら)涙(なみだ)を流(なが)し乍(な)ら(伴) ア、可(か)哀(あい)相(さう)事(こと)をした今(いま)一(いっ)ト足(あ)早(はや)かつたなら斯(こ)様(さん)な非(ひ)  
業(ごう)な死(し)はとらせまいものをと虚(うそ)を遣(つか)ひ人(ひと)を走(は)せて其(その)筋(すぢ)へ届(とど)け御(ご)檢(けん)死(し)も濟(す)んで家(か)に引(ひ)  
取(と)り何(なん)事(こと)もなく村(むら)方(かた)へ野(の)邊(へ)送(おく)りをして仕(し)舞(ま)したお伴(伴)藏(ざう)が殺(ころ)したと氣(き)がつくものは



有ません段々日數も立つて七日目の事ゆゑ伴藏は寺参りをして歸つて來ると召仕のおますといふ三十一才になる女中が俄かにがた／＼と涙へはじめてウンと呻つて倒れ何か詭言を云つて困ると番頭が云ふから伴藏が女の寢て居る所へ來て(伴)お前さんち鹽梅だ(ます)伴藏さん貝売骨から乳の下へ掛けてズ／＼と突徹された時の痛たかつたこと(文)旦那さま變な事を云やす(伴)おます氣を體かにしる風でも引て熱でも出たのだらうから蒲團を澤山かけて寢かして仕舞へど夜着を掛るとおますは重い夜着や搔卷を一度にはね退けて蒲團の上にチャンと坐りツイッと伴藏の顔を睨むから(文)へんち鹽梅ですな(伴)おますしつかりしろ狐にでも憑かれたのトやアないか(ます)伴藏さん此様な苦しい事はありません貝売骨のところから乳のところまで脇指の先が出る程までズ／＼と突かれた時の苦しきは何んともかとも云やうがありませんと云はれて伴藏も薄氣味悪くなり(伴)何を云ふのだ氣でも違ひはしないか(ます)お互ひに斯うして八年以來貧乏世帯を張りやツとの思ひで今はこれ迄になつたのをお前は私を殺してお國を女房にしやうとはマア餘まり酷いとやアないか(伴)

これは變な鹽梅だと云ふもの、腹の内では大に驚き早く療治をして直したいと思ふ所へ此節幸手に江戸から來てゐる名人の醫者があるといふから夫れを呼ばふと人を走せて呼びに遣りました

第十八回

賤婢得病忽爲鬼語  
凶漢失言被破險策

伴藏は女房が死で七日目に寺参りから歸つた其晩より下女のおますが訝な詭言を云ひ幽霊に頼まれて百兩の金を貰ひ是迄の身に取付たの萩原新三郎様を殺したの海音如來のお守りを盗み出し根津の清水の花壇の中へ埋めたなど、演へり立るに奉公人等は何だか様子分らぬ事故只馬鹿な謔語をいふと思て居りましたが伴藏の腹の中では女房のおみねが己に取付事の出來まい所から此女に取付て己の悪事を演べらせて御上の耳に聞こへさせ己を召捕り御仕置にさせて怨みを晴す了箇に違ひなし那の下女さへ居なければ斯様な事もあるまいから筆を宿元へ下げて仕舞かいや／＼待てよ宿へ下げ那の通りに演べられては大變だコリヤ迂濶りした事は出來ねへと思案



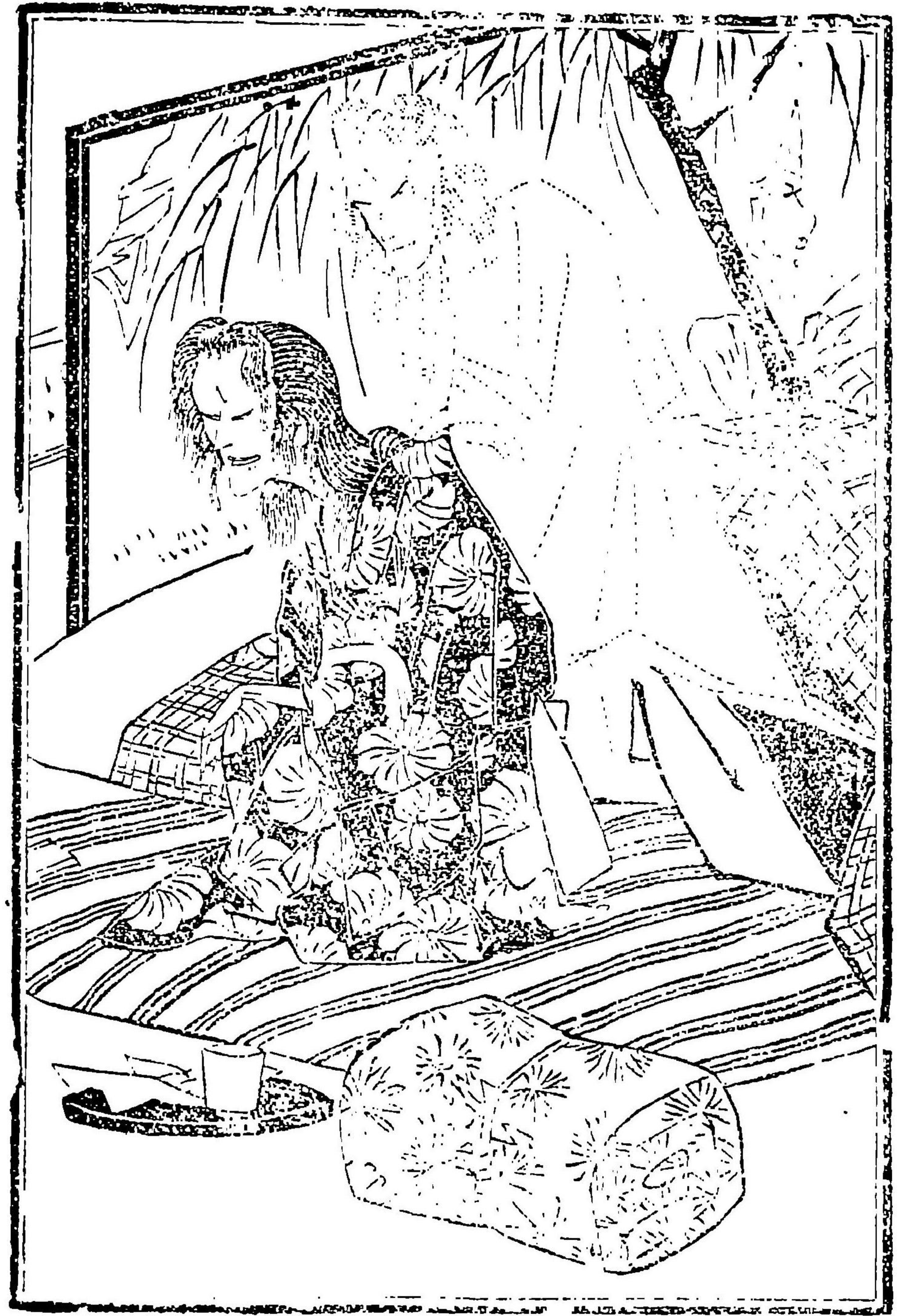
籠 燈 丹 牡

にくれて居る處へ先程幸手へ使に遣りました下男の仲助が醫者同道で歸て來て(仲)  
 旦那只今歸やした江戸から出あすつた御上手をお醫者様だそうだが漸と願やして  
 御一所に來てもらいやした(伴)これはく御苦勞さま手前方は斯云ふ商賣柄見世も  
 散かつて居り升から先此方へ御通下さいましと奥の間へ案内をして上座に請じ伴藏  
 は慇懃に両手をつかへ(伴)初めまして御目通りを致します私に開口屋伴藏と申しま  
 す者今日は早速の御入で誠に御苦勞様に存ます(醫)ハイく初めまして何か急病  
 人の御様子ハ、アお熱で變な譚語などを云と、言ながら不圖伴藏を見てチャこれは  
 誠に暫らくこれはどうも誠にどうもどうもあすつた伴藏さん先ッ一別以來相變らず御  
 機嫌宜しくどうもマア不圖所でお目に掛ましたこれは君の御新宅かへ恐入たぬへ  
 併し君は斯くあるべき事だらうと君が萩原新三郎様の所に居る時分からあの伴藏  
 さんおみねさんの夫婦がどうも機轉の利き方才智の廻る所から中々只の人ではあ  
 い今にあればあらい人にあると云ていたが十指の指さす處鑑定が違はず實に君はたい  
 した表店を張り立派な事におありあすつたあ(伴)イヤこれは山本志丈さん誠に思

籠 燈 丹 牡

ひ掛ねへ所でお目に掛りやした(志)實は私も人には云へねへが江戸を喰詰め醫者も  
 していらねへから猫の額のやうな家だが賣つて其金子を路用として日光邊の知己  
 を使つて往く途中幸手の宿屋で相宿の旅人が熱病で悩むとて療治を頼まれ其脈を取  
 れば運よく全快したが實は僕が療したんぢやアねへ自然に治つたんだが運に叶つて  
 忽ちにあれは名人だ名醫だとの評が立ちあつちから療治を頼まれ實はいひ加減  
 に遣つては居るが相應に藥禮をよこすから足を留て居たもの、實は己ア醫者は出來  
 ぬへのだ尤傷寒論の一冊位は讀た事は有が一体病人は嫌へだあの臭い寢所の側へ寄  
 るのは厭だから金さへあればツイ一盃呑む氣にあるやうなものだから江戸を喰詰て  
 來たのだがあの妻君はお達者かへイヤサおみねさんには久しく拜顔を得あいがお達  
 者かへ(伴)アレハ口どもりしが八日跡の晩土手下で盜賊に切り殺されましたヨそ  
 れから漸やく引取て吊らひをだしました(志)ヤレハヤこれはどうも存外な嘸お愁傷  
 か馴染だけに猶更お察し申ますわの方は誠に御貞節ない、御方で有つたがこれが儂  
 家で云ふ因縁とでも申ますのか嘸マア残念な事でありましたらうそれでは御病人は







お家内ではお子(伴)エ、内の女ですが何だか熱にうかされて妙お首を云て困りま  
す(志)それじやヤ一寸診て上げて跡で又いろく昔の話をしおながら緩りと一盃やら  
うじやアないか知らない土地へ来て馴染の人に逢ふと何だか懐しいものだ病人は熱  
なら造作もないからねへ(伴)文助や先生は甘ひ物は召上らねへがお茶と菓子と持て  
来て置け先生こちへお出なせへ(愛)女部屋で(志)左様かマア暑いから羽織を脱うヨ  
(伴)おまともやお醫者様が入來つたから能診ていたいきお氣をしつかりして居る變お  
事をいふお(志)どう云ふ御様子どんな鹽梅でと云おがら側へ近寄ると病人は重い抱  
巻を反退けて蒲團の上に屹と坐り志丈の顔をツツと見つめて居る(志)お前どう云  
梅で大方風がこうして熱とあつたのだらう悪寒でもするかへ(ま)山本志丈さん誠  
に久ま御めにかゝりませんでした(志)これは妙だ僕の名を呼だぜ(伴)こいつは妙  
お譚話ばかり云ておまとも(志)だつて僕の名を知て居るのが妙だフウンどういふ  
様子だへ(ま)私はね此貝売骨から乳の所までズンくど伴藏さんに突れた時の  
(伴)これく何をつまらねへ言をいふんだ(志)宜しいヨ心配したまふふそれからど

うしたへ(ま)貴郎の御存んじの通り私共夫婦は萩原新三郎様の奉公人同様に追使  
はれ既足に成て駈ずり廻つて居ましたか萩原様が幽霊に取つかれたものだから  
院の和尚から魔除の御札を裏窓へ貼付けて置いて幽霊の遣入ないやうにした所から伴  
藏さんが幽霊に百両の金を貰つて其御札を剝し(伴)何を云ふんだおア(志)よろしい  
よ僕だからこれは妙だく、へイそこで(ま)其金から取付て今はこれだけの身代  
となりそれのみならず萩原さまの御首に掛てる金無垢の海音如來の御守りを窺み出  
し根津の清水の花壇に埋め剩へ萩原様を蹴殺して体よく跡を取繕ろひ(伴)何をどん  
でもお事云ふのだ(志)よろしいヨ僕だから妙だくへイ夫から(ま)そふして  
おまへそんなおおぶく錢で是迄にあつたのにお前は女狂ひを初め私を邪魔にして殺そ  
どは餘まり酷い(伴)どうも仕様がなない何といふのだ(志)よろしいヨ妙だ心配した  
まふなこれは早速宿へ下げたまへと云ふと宿で又こんな譚話を云ふと思し召さうが  
下げれば屹度云はあい此家に居るから云ふのだ僕も壯年の折かふいふ病人を二度は  
ど先生の代脈で手掛けた事があるが宿へ下げれば屹度云はあいから下げべし



籠 燈 丹 牡

と云れて伴藏は「小氣味がわるいけれども山本の勤めに任せて早速に宿を呼寄せ引渡し表へ出るやいなや正氣に復つた様子あれば伴藏も安心して居ると今度は番頭の文助がウンと呻つて夜着をかむり寝たかと思ふと起上り幽靈に貰つた百兩の金でこれ丈けの身代にあり上りといひ出したれば又宿を呼んで下げてしまふと今度は小僧が呻り出したれば又宿へ下げてしまひ奉公人残らず宿へ歸し跡には伴藏と志丈と二人ざりになりました(志)伴藏さん今度呻ればおいらの番だが妙だつたねガ伴藏さん打明て断しをしてくんちせへ萩原さんが幽靈に魅られ骨と一所に死て居たどの評判もあり又首に掛た大事の守りが掬代つて居たど云ふが其鑑定はどうも分らあかつた尤も白翁堂と云ふ人相見の老爺が少しは覺て新幡隨院の和尚に話と和尙は疾より覺つて居て盗んだ奴が土中へ埋め隠してあると云ふたうだが今日初めて此病人の話によれば僕の鑑定では慥にお前と見て取たがもう斯うあつたらば隠さずに云つてお仕舞そうすれば僕もお前と一つに成つて事を計ふじやないか善悪ともに相談をせしやうから打明け給へ夫から君はおかみさんが邪魔になるものだから殺して置て

籠 燈 丹 牡

盜賊が切殺したといふのだらうそうでせう〜といはれて伴藏最早隠しをふせる事にもいかず(伴)實は幽靈に頼まれたと云ふのも萩原様のあゝ云ふ怪しい姿で死んだといふのもいろ〜譯があつて皆な私が拵らへた事といふのは私が萩原様の助を殺して置て密そりと新幡隨院の墓場へ忍び新塚を掘起し體骸を取出し持歸つて萩原の床の中へ並べて置き怪しい死さまに見せかけて白翁堂の老爺をばいつペい欺込み又海音御來の御守もまんまど首尾好く盗み出し根津の清水の花壇の中へ埋めて置き夫れから己が色々法螺を吹て近所の者を怖がらせ皆あちこちへ引越たを好しほにして己も又おとねを連れ百兩の金を掴んで此土地へ引込んで今の身の上どころが己が脇の女に掛り合た所から噂アが怪氣を起し以前の悪事をガア〜と吹鳴り立てられ仕方なく旨く賺して土手下へ連出して己が手に掛け殺して置て退剎に殺されたとき空涙て人を欺かし品をも濟して仕舞た譯なんだ(志)能く云た誠に感服大概の者ならそう打明けては云へぬものだに己が殺したと速に云などは是は悪黨ア、悪黨お前にそふ打明けられて見れば私は多辨か人間だがこればかりは口外はしさいヨ其交り



少し好みがあるがどうか叶へておくれと云ふと何か君の身代でも當てにせざるやうだがそんな譯ではない(伴)ア、くろれはいゝともどんな事でも聞やせうからどうか口外はしてくださるまゝと云ながら懷中より廿五兩包を取出し志丈の前に差置て(伴)少ねへが切餅をたつた一ツ取て置てくんねへ(志)これはいはない賃かへ藥體ではおいね宜しい心得た何だかこう金が入ると浮氣になつたやうだから一盃呑みながら緩りと昔語りがしてへのだが爰の内ア陰氣だからこれからどつかへ往て一盃やらうじやアねへか(伴)そいつはよからうそんなら巳らの馴染の笹屋へ往きやせうと打連立て家を立出で笹屋へ上り込み差向ひにて酒を酌交し(伴)男ばかりじゃア旨くねへか(女)女を呼びにやらうとお國を呼寄る(國)チャ旦那御無沙汰を能入しやつて伺ひまさればお内儀さん不慮の事が御坐いましたと定めて御愁傷な事で私も旦那に一寸と御目に懸りたいと思つて居りました内の人の疵も漸やく治り近々のうち越後へ向けて今一ト度往きたいと云て居まゝから行た日には貴郎には御目にかゝるとも出来な

いと思つて居る所へお使で餘り嬉しいから飛んで來たんでよ(伴)ね國御連の方に何

故御挨拶をしまいのだ(國)おれはあなた御免遊せと云ひながら志丈の貌を見てチャ  
 〱 山本志丈さん(志)誠に暫くこれは妙どうも不思議な國さんが爰にお出とは計らざる事でこれは妙内々御様子を開けば思ふ方と一所から深山の奥までと云ふやうお意氣事筋で誠に不思議これは希代だ妙々々と云はれてお國はギツクリ驚いたは志丈はお國の身上をば悉く知つた者もえ若し伴藏に演べられてはならぬと思ひ(國)志丈さん一寸と御免遊ばせと次の間へ立ち(國)旦那一寸入らしやい(伴)アイよ志丈さん一寸と待てお呉れよ(志)ア、宜い緩くり嘶しをして來たまへ僕は左やうな事には馴れて居るから苦しくないお構ひよく緩くりと嘶しをして入しやい(國)旦那どう云譯であの志丈さんを連れて來たの(伴)おれは内に病人があつたから呼んだのよ(國)旦那那の醫者の云ふ事をなんでも眞實にしちやアいけませんヨあんな嘘つきの奴はありませぬ那奴の云ふ事を眞實にせるとんでもない間違ひが出来まゝよ人の合中を突つく酷い奴でそこから今夜は那の醫者を何所へ遣て貴郎獨り爰に泊つて居てくださいなそうすれば内の人を寢かして置て貴郎の所へ來ていろくお嘶しもしたい事



がおりますから宜うござりまするか(伴)よし／＼それじやア内の方をい、塩梅にして  
 屹度来ねへよ(國)屹度さますから待ておいでよとお國は伴藏に別れ歸り行く(伴)ヤ  
 ア志丈さん誠にお待どう(志)誠にどうもアハ、那の女は最う四十に近いだらうが若  
 いねへ君もなか／＼御腕前だね大方君は那の婦人を喰つて居るのだらうがこれから  
 は最う君と善惡を一ツにしやうと約束をした以上は君の爲めにならねへ事は僕は云  
 ふよ一休君は那の女の身上を知つて世話をするのか知らないのか(伴)あらア知らね  
 へが前さんは心安いのか(志)那の婦人には男が附て居る宮野邊源次郎と云て兼  
 下の次男だ其奴が悪人で萩原新三郎さんを戀慕つて娘の親御飯島平左衛門と云ふ  
 兼下の奥様附で来た女中で奥様が亡なつた所から手がついて妾と成たが今のお國と  
 源次郎と不義を働き恩ある主人の飯島を切殺し有金二百六十兩に大小を三腰とか印  
 籠をいくつとかを盗取逐電して人殺しの盗賊だと跡から忠義の家來藤助とか孝  
 助とか云ふ男が主人の敵を討たいと追かけて出たそうだ私の思ふのはあれは君に惚  
 れたのでなく源次郎が可愛から前のお國の云事を聞たなら亭主の爲めになるだらうと

心得身を任せ相對問男ではないかと僕は鑑定するが今聞けば急に越後へ立つと云ひ  
 僕をばいて君獨り寝ている處へ源次郎が踏込でもすり掛け二百兩位の手切れは取る  
 目算に違へねへが君は承知かへだから君は今夜爰に泊つて居てはいけねへから僕と  
 一所にとつかへ女郎買に往てしまひ那奴等二人に素空を喰はせるとはどうだへ(伴)  
 ム、成程そうか夫れじやアそうしやうと連立て爰を立出て鶴屋と云ふ女郎屋へ上り  
 込む跡へお國と源次郎が笹屋へ来て様子を聞けば先き歸つたと云ふと二人は羨れ  
 て立歸り(源)お國もう斯うなれば仕方ないから明日は我が關口屋へ掛合に行き若  
 し向ふでしらをきつた其時は(國)私が行てしやべりつけ口を明かさずだんまりども  
 すつてやらうと其晩は寝てしまひました翌朝になり伴藏は志丈を連れて我家へ歸へ  
 り種々ゆふへの惚氣など云つて居る店前へ(源)お頼んや／＼(伴)商人の店前へお頼  
 んやすと云ふのは訝しいが誰だらう(志)大方夕べ噺した源次郎が来たのかも知れぬ  
 へ(伴)そんならお前其方へ隠れて居てくれ(志)彌々むづかしくなつたら飛出さうか  
 (伴)い、から引込て居なよ(伴)へい／＼少々宅にとりこみが有りまして店をしめて



籠 燈 丹 牡

居りまどがなにか御用ならば店を明けてから願ひたう御ざりまど(源)イヤ買ひもの  
 では御座らん御亭主に少々御面談いたしたく参つたのだ一寸明けてください(伴)左  
 やうで御座いますか先づおわがり(源)早朝より罷りいでまして御迷惑貴郎が御主人  
 か(伴)へイ關口屋伴藏は私しでございませう爰は店前どうぞ奥へお通りくださいまし  
 (源)然らば御免を蒙むると蠟色鞆茶柄の大刀を右の手に下げた儘に亭主に構はず  
 ツと通り上座に座と(伴)どあた様でござりまどか(源)これは始めてお目に懸りまし  
 た手前は土手下に世帯を持って居る宮野邊源次郎と申す鹿忍の浪人家内國事笹屋方に  
 て働き女をし僅お給金にて漸々其日を送り居る處旦那よりふかく御最負を戴くよし  
 毎度國より承はり居まどければ何分足痛にて歩行も成り兼ねまどれば存じながら御  
 無沙汰重々御無禮をいたした(伴)これはお初にお目通りをいたしました伴藏と申す  
 不調法者幾久敷御懇意を願ひまどお前様の塩梅の悪いと云ふ事は聞いていましたか能  
 くトア御全快私もお國さんを最負にせるといふ物の最負の引倒しで何の役にも立  
 らませぬ旦那様の御新造かわへどうも恐れ入た勿体ねへ馬士や私のやうお者の機嫌

籠 燈 丹 牡

づまを取りなさるかと思へばお氣の毒だそれが爲めに失禮も度々致しやした(源)ど  
 う致しまして伴藏さんにチト折入て願ひたい事がありまどか私共夫婦は最早旅費も  
 遣ひあくと殊には病中の入費藥禮や何やかやで全く財布の底を拂き漸く全快しまし  
 たれば越後路へ出立したくも如何にも旅費が乏しくどうしたら宜らうと思案の側か  
 ら女房が關口屋の旦那は御親切のお方も多分附てお話しをしたらお見繼ぎくださる  
 事もあらうとの勧めに任せ参りましたがどうか路金を少々拜借が出来ますれば有難う  
 存じます(伴)これはどうもさう貴郎のやふに手を下げて頼まれては面目がありません  
 んがど中は幾許かしら紙に包んで源次郎の前にさし置き(伴)ほんの草鞋錢でござい  
 ますか御請取り下せへと云はれて源次郎は取上げて見れば金千疋(源)これは二両二  
 分イヤサ御主人二両二分で越後まで足弱を連れて往かれますと思ひおさるか御深切序で  
 に最そつと御惠みが願ひたい(伴)千疋では少ないと仰やるから幾許上げたらよいの  
 でございませう(源)どうか百金御惠みを願ひたい(伴)一本へ申談云つちやアいけれ  
 斯かなんぞじやアあるめへし一本の二本のと轉がつちやアいねへヨ旦那へ斯ういふ







事ア一体こつちで上る心持次第のもので幾許かくらと限られるものぢやアねへと思ひやす百両くれろと云われちやア上げられねへ又道中もしやうで切のさいもの千両も持て出て足りずに内へ取りによこす者もあり四百の錢で伊勢参宮をする者もあり二分の金を持って金毘羅参りをしたと云話もあるから旅はどうともしやうによるものだからそんな事を云たつて出来はしません誠に商人杯は遊んだ金は無もので表店を立派に張て居ても内々は一兩の錢に困事もあるのだ百両くれろといつてもそんな私はお前さんに御恵みをする縁がねへ(源)國が別段御最負になつて居るから兎やか面倒云はず錢別として百金貫はうじやアねへか何も云はずにサ(伴)お前さんはあつう訝な事を云はつしやる何かお國さんと私と姦通てゝも居るといふのか(源)オ、サ姦夫の廉で手切の百兩を取りに来たんだ(伴)ム、私が不義をしたがどうした(源)黙れヤイ不義をしたとはなんだ捨て置き難き奴だと云ひおがら大刀を側へ引寄せ親指にて鯉口をプツリと切り(源)此間から何かと胡亂の事もあつたれど堪らへくて是迄穩便沙汰に致し置き昨晚夫れとなく國を責めた所國の申すには實は濟まぬ事

だが貧に迫つて止むを得ずあの人に身を任せたと申したから其場に於て手打に仕舞とは思つたれども斯う云ふ身の上だから勘辨いたし事穩かに噺しをしたに手前の口から不義したと口外されては捨て置き難てへ表向に致さんと噂り立て奴鳴ると(伴)静におしませへ隣はないが名主のさい村じやアないヨお前さんがそう噂り立て鯉口を切り私の髪を打切る權まくを恐れてハイ左やうあらとお金を出すやうな人間と思ふのは間違へだ私なんぞは首が三ツあつても足りねへ身体だ十一の時から狂出して脱け参りから江戸へ流れ悪いといふ悪い事は二三の水出し遣らずの最中野田長半の鼻ッ張りヤアの賭場まで逐て来たのだ今は膀胱を白足袋で隠しなまぞらを遣つてゐるものゝ悪い事はお前より上だヨそれに又姦夫くといふが那の女は飯島平左衛門様の妾でそれとお前が姦通て殿様を殺し大小や有金を引摺ひ高飛をしたのだから云はゞお前も盗みもの夫れにお國も我なんぞに惚れたはれたといふのぢやなくお前が可愛ばツかりで病氣の藥代にでもする積りて此方に持ち掛たのを幸ひに我もそうとは知りながらツイ男のいじきたな手を出したのは此方の過りだから何も云はず



に千疋を出し別段儀別にしやうと思ひ是れ此通り廿五兩を遣ふと思つて居る處一本よこせと云はれちやアどうせ細つた首だから素首が飛ても一文もやれぬへ夫れにお前能く聞ねへ江戸近のこんな所にまどくして居ると危ねへせ孝助とか主人の敵だど云てお前を狙つて居るからお前の首が先へ飛ぶよ申談じやアねへと云はれて源次郎は途胸を突て大いに驚き(源)さやうを御苦勞人とも知らず只の堅氣の旦那と心得威して金を奪ふとしたは誠に恐縮の至り然らば相濟せんが之れを拜借願ひます(伴)早く往きなせへ危険だに(源)さやうならぬ暇申します(伴)跡をしめて行くくんな志丈は戸棚より潜り出し(志)旨かつたなア感服だ實に感服君の二三の水出しやらすの最中とは感服ア、どうもそこが悪黨ア、悪黨これより伴藏は志丈と二人連立て江戸へ参り根津の清水の花壇より海音如來の像を掘出す處から悪事露顯の一掃は次回まで御預りに致しませう

第十九回

老父乗喜語既往  
名僧察機説未來

引續きますする怪談牡丹燈籠のお話しは飯島平左衛門の家來孝助は主人の仇なる宮野邊源次郎お國の兩人が越後の村上へ逃げ去りましたとのことへ跡を追て村上へ参り諸方を許儀致しましたがとんと兩人の行衛が分りませんで又我母おりへと申す者は内藤紀伊守の家來にて澤田右門の妹にて十八年以前に別れたが今も無事で居られる事か一目御目にかゝりたい事と段々御城中の様子を聞合せます處澤田右門夫婦は疾に相果て今は養子の代に相成て居る事ゆへ母の行く衛さへとんと分らず止を得ず此所に十日ばかり彼所に五日逗留いたし東西と心當りの處を尋ね深く踏込んで探つて見ましたれども更に分らず空しく其年も果て翌年に相成つて孝助は越後路から信濃路へかけ美濃路へ掛り探しましたが一向に分らず早や主人の年回にも當る事ゆへ一度江戸へ立歸らんと思ひ立ち日數を経八月三日江戸表へ着いたし先づ谷中の三崎村なる新幡隨院へ参り主人の墓へ香花を手向け水を上げ墓原の前に両手を突きやして(孝)旦那様私には身不肖にして未だ仇たるお國源次郎に廻り逢ず未だ本懐は遂げません丁度旦那様の一周忌の御年回に當りませる事ゆへ此度江戸表へ立返り御



籠 燈 丹 牡

法事御供養をいたした上早速又仇の行衛を探しに参りませう此度は方角を違へ是非とも穿鑿を遂げまするの心得何卒草葉の蔭からお守りくださつて一時も早く仇の行衛の知れませするやうにお守りくだされまじと生たる主人に物云如く恭しく拜を遂ましてから幡隨院の支關へ掛りまして御頼申升く(取次)ドウレハどちらからお出だナ(孝)手前は元牛込の飯島平左衛門の家來孝助と申者でございませが此度主人の年回を致したき心得で墓参りを致しましたが方丈様御在寺なれば御目通りを願ひたう存トます(取次)さやうですか暫く御扣へおさいと是から奥へ取次をしますと此方へお通し申せといふ事ゆへ孝助は案内に伴られ奥へ通りますると良石和尚は年五十五歳道心堅固の智識にて大悟徹底致し寂莫と坐蒲團の上に座つて居りまするが道力自然に表に現はれ孝助は頭が自然にさがるやうな事(孝)これは方丈様には初めて御目にかゝりませる手前事は相川孝助と申者でございませが當年は舊主人飯島平左衛門の一周忌の年回に當る事ゆへ一度江戸表へ立歸りまじなが爰に金子五両ございませするが之れにて宜しく御法事御供養を願ひたう存じ升(良)ハイ初めましてマアこの

籠 燈 丹 牡

ちへ來おさい之れはマア感心を事(孝)コレ茶を進せいふ前さんが飯島の御家來孝助殿か立派な人でよい心掛け長旅をいたした身の上なれば定めて澤山の施主もあるまい一人か二人位の事であらうから内の坊主どもに云付て何か精進物を拵らへさせ成るだけ金のいらぬやうに手は掛るが皆こちらで遣て置が一ヶ寺の住職を頼んで置きませすがお前ナア餘り早く來ると此方で困るから晝飯でも喰つてからそろく出掛け夕飯は此方で喰ふ氣で來おさいとしてお前は是から水道端の方へ行きませらうがお前を待て居る人がたんとある又お前は悦び事か何か目出度事があるから早う行て顔見せてやんなさい(孝)ハイ私は水道端へ参りまするが貴郎はどうして夫れを御存じ不思議な事(孝)ございませといひおがら左様ならば明日晝飯を仕舞まして又出ますから何分宜しく御願ひ申しませる御機嫌よろしうと寺を出ましたが心の内に思ふ様どうも不思議な和尙様だどうして私が水道端へ行く事を知て居るだろふか眞成に占者のやうお人だといひながら水道端なる相川新五兵衛方へ参りましたが孝助は養子に成て間もなく旅へ出立し一年ぶりにて立歸りまじな事もある少しは遠慮いたし置所口







から御免くださいまし只今歸りましたよコレ〜善藏どん〜(善)なんだヨ掃除屋  
 が来たのか〜(孝)ナニ私だヨチヤこれはどうも誠に失禮を申上げましたいつも今自  
 分掃除屋が参りまゐるものでこれから粗勿を申しましたが能くマアお早く御歸りにな  
 りました旦那様〜孝助様が御歸りに参りました(相川)ナニ孝助殿が歸へられたと  
 か何所に御出になる(善)〜イ御臺所にゐらつしやいませ(相川)ドレ〜之れはマア  
 あんて臺所などから来るのださう云へば水は汲で廻すものを善藏コレ善藏何をぐる  
 く廻つて居るのだコレ婆々ア孝助殿が御歸りだヨ(婆)若旦那様が御歸りで△いま  
 すかこれはマア無お疲れてございますだらう先づ御機嫌宜しう(孝)御親父様にも御  
 機嫌宜しう私も都度〜書面を差上げたき心得ではございませるが何分旅先の事ゆ  
 る思ふやうには御便りも致し難く御親父様はどうなされたかと日々御案事申します  
 るのみでございましてが先づはお健やかある御顔を拜しまして誠に大悦に存じます  
 (相川)誠に前も目出たく御歸宅おされ新五兵衛至極満足いたしましたハイ實に  
 テイ鳥の鳴ぬ日はあるがと云ふ譬の通りでお前の事は少しも忘れぬ事はない雪の降

る日は今日あたりはどんな山と越る風の吹く日はどんな野原と通るのと雨につけ風  
 につけお前の事は少しも忘れぬ事はござらんとこへ思ひがけなく御歸りにな  
 り誠に喜ばしく思ひます娘もお前の事は案に暮しお前の立た當坐は只泣て  
 ばのり居りましたのら私がそんなにくよくよして煩ひでもしてはいないのら氣と  
 取り直せよといひ聞せて置きましたがお前もマア健やうで御早く御歸りだ(孝)私は  
 今日江戸へ着すぐに谷中の幡隨院へ参詣といたして來ましたが明日はちやうど主人  
 の一周忌の年回にあたりますゆるゑ法事供養といたしたく立のへりました(相川)そ  
 うの如何にもあしたは飯島様の年回に當るのらと思たがお前がお留守だから私でも  
 代参に行うのと咄しとして居たのサこれ婆ア爰へ來な孝助様が御歸りになつた(婆)  
 アレ若旦那様お歸り遊ばしませ御機嫌様よろしう貴郎がお立になつてからといふも  
 のは毎日お噂はのりいたして居りましたが少しもお寢れもなくお色は少しお黒くお  
 なり遊ばしましたが相替らす能くマアね〜(相川)婆々ア渠と伴れて來なヨ(婆)デモ  
 只今能寝ねしていらつしやいますのらおめえめが覺てのらお笑ひ顔と御覽に入れる



方が宜しうございませう(相川)ウツラうだ初めて逢ふのにむりにめんとござい  
て泣顔ではいゝんらマカ大概にして爰へ連れて来て来い娘お徳は次の間に乳兒と  
抱て居ましたが孝助の歸ると聞き飛立ばり嬉し涙と拭ひ乍ら出て来て(徳)旦那様  
御機嫌様よろしう能くマアおはやくお歸り遊ばしました毎日く貴郎のお噂さばの  
りいたして居りましたがお寢もありませんでお嬉しう存じます(孝)ハイお前も達  
者で目出たい私が留守中はお親父様の事何角世話に成りました旅先の事ゆる都度  
く便りも出来ずとなされたのを毎日案じるのみであつたが誠に皆な達者な顔  
と見るといふは此様な嬉しいことはない私は昨晚旦那様の御出立に成る處と夢に見  
ましたが能く人が旅立の夢と見ると其人にお目にお目にお目にお目にお目とお目にお目  
お近いうち旦那様にお目にお目にお目とお目とお目とお目とお目とお目とお目とお目  
ませんでした(相川)おれもおなじやうな夢と見たが婆々マア抱てお出最うおさたる  
う婆々は奥より乳兒と抱て参る(相川)孝助殿これと御覽見兒だね(孝)どちらのお  
子様で(相川)ナニサお前の子だアね(孝)御申談ばり云ていらっしやいます私は昨

年の八月旅へ出されたもので子供などはございませぬ(相川)只た一ぺんでも子供は  
出来まじヨお前は娘と一ツ寝としたりうだら只た一度でも子は出来まじ只た一度  
で子供が出来るといふのは餘程縁の深い譯で娘も初めのうちはくよくよして居る  
ら私が懐妊として居るら夫ではいゝん身体に障るらくよくよせんが宜しいと云て  
居るうちに産落したのら私が名付け親でお前の孝の字と貰つて孝太郎と付て遣りま  
したよマア能く育て居る事と御覽ヨ(孝)ハイ誠に不思議な事で主人平左衛門様か遣  
言に其方養子となりて若し子供が出来たら男女に拘はらず其子と以て家督と致し  
家の再興と頼むと御遺言書にありましたが事によると殿様の生れがわりも知れま  
せん(相川)ナ、至極左様のも知れん娘も子供が出来てからねへ嬉し紛れに親父様私  
は旦那様の事はお案事申しまゐるが此子で出来ましておらは誠に能く旦那様に背  
居まするのら少しは紛れて旦那様と一ツ所に居るやうに思われ升といふたのら私が  
又あんまりひびく抱しめて坊の腕でも折るといけないなどと馬鹿と云て居る位な  
事で善藏や(善)ハイく善藏や(善)参つて居ます何でございませぬ(相川)何だお前も



板橋まで若旦那と送て行たッけな(善)へい参りましたこれは若旦那様誠に御機嫌よ  
るしうあの折は實にお別れが惜くて泣ながら戻つて参りましたが能くマアお健やの  
でいらッしやいます(孝)あの折は大きに御世話さまであつたのう(相川)それは兎も  
角も肝腎の仇の手掛りか知れました(孝)未だ仇には廻り逢ひませんが主人の法事  
としたり一先づ江戸表へ立歸りました法事といたしまして直に又出立いたします  
(相川)フウ成程明日法事に行くのだね(孝)左やうでございませぬ親父様と私と参  
りまする積りでございませぬ(孝)それに良石和尚の智識なる事は兼て聞及んでは居  
ましたが應驗解道究りなく百年先の事と見ぬくといふ程だと承つて居まするが今日  
和尚の云葉に其方は水道端へ参るだらう参る時は必ず待て居る者があり且つ慶び事  
があるぞ申しましたが私の考へには斯く子供の出来た事迄良石和尚は知つて居るに  
違ひ有りませぬ(相川)ハテねへそんな所迄見ぬきましたかへ智識なぞといふ者は跌  
躄量見智であの和尚は谷中の何とか云智識の徒弟と成り禪學と打破つたと云事と承  
はり居るがゑらひ物だねへ善藏や大急ぎで水道町の花屋へ行て御めでたいのだから

何か御頭付の魚を三品ばかりにそれから能い御菓子を少し取てくるやうに道中には  
餘り美しい御菓子はあいかから夫から鮮も道中では良いのは食べられあいかから鮮も少し  
取て来るやうに夫から孝助殿は酒はあがらんから五合ばかりにして味淋を極良のを  
飲のだから二合ばかり夫から蕎麥も道中にはあるが醬汁がわるいから良い蕎麥の御  
膳の蒸籠を取て参れ夫からお汁粉も詔らへて参れと種々な物を取寄せ其晩はめでた  
う祝しまして床に就きました其夜は咄しも盡きやらす長き夜も忽ち明ける事にあ  
り翌日刻限を計り孝助は新五兵衛と同道にて水道橋を立出で切支丹坂から小石川に  
かゝり白山から團子坂を下りて谷中の新幡隨院へ参り立關へかゝると御寺には疾う  
より孝助の来るのを待て居て(良)施主が遅くつて誠に困なア坊主は皆本堂に詰懸  
けて居るからサア早く急ぎ立てられ急ぎ本堂へ直りますと彼是れ坊主の四  
五十人も押並ひ最と懇ろなる法事供養を致し施餓鬼をいたします内に最早や日は  
西山に傾く事にありましたゆゑ僧侶達には馳走なぞして返へしてしまひ跡で又孝助  
新五兵衛良石和尚の三人へは別に膳がなほり和尚の居間で一口飲むことになりまし







籠 燈 丹 牡

た(相川)方丈様には初めて御目に惚ります私には相川新五兵衛と申す粗忽な者でございます  
 います今日又御懇ろな法事供養をお成くださいされ佛も嘸かし草束の蔭から満足な事  
 ございませう(良)ハイお前は孝助殿の身御かへ初めまして孝助殿は器量と云ひ人柄  
 と云ひ立派な正しい人じや申々正直な人間で餘程利口じやがお前は粗々かしそうお  
 人じや(相川)方丈様は能く御存じ氣味のわるい様お御方だ(良)竟ては孝助殿は旅へ  
 行かれる事を承つたが未だ急には立ちませまいノウ私に少し思ふ事があるから明日  
 晝飯を喰つて六から八ッ前後に神田の旅籠町へ行きなさい其處に白翁堂男齋といふ  
 人相を見る親爺が居るが今年最七十だが達者な老人でなア人相は餘ほど名人だヨ  
 是れに頼めばお前の望みの事は分らふから行て見なさい(孝)ハイ有難う存じます  
 神田の旅籠町でございませうか畏りました(良)お前旅へ行くおれば私が餞別を進ぜう  
 や御前が折角呉れた布施は此方へ貰つて置くが又私が五兩餞別に進ぜうや夫から此  
 線香は外から貰つてあるから一箱進ぜやう佛壇へ線香や花の絶へんやうに上げて置  
 きなさい是れだけは私が志じや(相川)方丈様恐れ入りまするどうも御出家様から御

籠 燈 丹 牡

線香など戴いては誠にあべこべな事で(良)そんな事はいはすに取て置なさい(孝)誠  
 に有難う存じます(良)孝助殿氣の毒だがお前はどうも危ない身の上でナア劍の上を  
 渡るやうなれども夫を恐れて跡へ送るやうな事ではまさかの時の役には立たん何て  
 も進むよりほかはない進むに利あり退くに利あらずと云ふ處だから何でも臆しては  
 ならんずつと精神を凝して假令向ふに鉄門があらうとも夫を突切て通り越す心がな  
 ければなりませんぞ(孝)有り難うござりませう(良)舅御さんこれはねへ精進物だ  
 が一体内で拵らへると云ふたは嘘だが仕出しや頼んだのじや美ふもあるまいが此  
 重箱へ詰めて置たから二重とも土産に持て歸り内の奉公人にでも喰はしてやつてく  
 ださい(相川)これは又御土産まで戴き實に何とも御禮の申さうやうはございません  
 (良)孝助殿お前歸りがけに屹度劍難が見へるがどうも道れ難いから其積りで行きな  
 さい(相川)誰に劍難がございませんと(良)孝助どのはどうも道れ難い劍難じや何輕く  
 て輕傷それで濟めば宜しいがどうも深傷じやろう間がわるいと斬殺されるといふ譯  
 トやどうも之れは遁れられん因縁じや(相川)私は最早や五十五歳に及びまするから



どう成つても宜しいが貴僧孝助は大事な身の上殊に大事を抱へて居ります故どうか一ツ貴僧御助けくださいませんか(良)御助け申と云ても之れはどうも助けるわけにはいかんなア因縁トヤからどうしても遁るゝ事はない(相川)左やうならばどうか孝助だけを御常寺へお留め置きくださいされ手前だけ歸りませうか(良)そんな弱い事ではどうもこうもならんわへ武士の一チ大事な物は劍術であらう其劍術の極意といふものには頭上へ晃めくはがねがあつても電光の如く切込んで来た時はどうして之を受るといふ事は知て居るだらう佛説にも利劍頭面に觸るゝ時如何といふ事があつて其時が大切の事じや其位な心得はあるだらう假令火の中でも水の中でも突切て行きあさい其代り是を突切れば跡は誠に樂にあるからサツと行きなさい其やうな事で氣後れがするやうな事ではいかんメツと突切て行くやうでなければいかん夫を恐れるやうな事ではなりませんぞ火に入て焼けず水に入て溺れず精神を極めて進んで行きなさい(相川)左やうなれば此も重箱は置て参りませう(良)イヤ折角だからマア持て行きなさい(相川)どちらへか通路はあさいませんか(良)そんな事をいはず

メンと行きなさい(相川)左やうならば挑灯を拜借して参りたうございませ(良)挑灯を持たん方が却てよろしいと云はれて相川は意地のわるい和尚だと吻やきながら挨拶もそわゝ孝助と共に幡隨院の門を立出でました

第二十回

識言 讒險 幸捕 兇賊 易占 辨惑 再會 慈母

孝助は新幡隨院にて主人の法事を仕舞其歸り道に遁れ難き劍難あり淺疵か深疵か運わるければ斬殺される程の劍難ありと新幡隨院の良石和尚といふ名僧智識の教へに相川新五兵衛も大いに驚き孝助は未だ漸く廿二歳殊にかわいゝ娘の養子といひ御主の敵を打込は大事な身の上と種々心配をしあがら打連立て歸る孝助は假令如何なる災害があつても夫れを恐れて一步でも退くやうでは大事を仕遂る事は出来ぬと思ひ刀に反を打ち目釘を濕し鯉口を切り用心堅固に身を固め四方に心を配りて参り相川は重箱を提げて孝助氣を付けて往けと云ひながら参りませると向ふより薄だゝみを押分けて血刀を提げ飛出して物をも云はず孝助に切掛ました此者は柴橋無宿の伴藏







にて築橋の世帯を代物付にて賣拂ひ多分の金子を以て山本志丈と二人にて江戸へ立  
退き神田佐久間町の醫師何某は志丈の悪意ですから二人りは爰に身を寄せて二三日  
逗留し八月三日の夜二人りは更るを待ちまして忍び来り根津の清水に埋めて置た金  
無垢の漸音如來の尊像を掘出し伴藏は手早く懐中へ入れましたか伴藏の思ふには我  
悪事を知つたは志丈ばかりこの儘に生け置かば後の恐れと伴藏は差たる一刀抜くよ  
り早く飛かゝつて出し抜けに力に任して志丈に切り付けますればアツと倒れる所を  
乗し掛り一刀逆手に持直し助へ突込こぢり廻せば山本志丈は其儘にウンと云て身を  
慄はせて忽ち息は絶へましたか此志丈も伴藏に組し悪事をした天罰のがれ難く堪る  
非業を遂ました死骸を見て伴藏は跡へさがり逃出さんとする所御用と聲掛八方より  
取巻かれたに伴藏も慌てふため必死となり取方へ手向ひなし死物狂ひに切廻り漸  
く一方を切抜けて薄だゝみへ飛込で往來の廣い所へ飛出す出合がしら伴藏は眼も眩  
み是れも同ト取方と思ひましたゆゑ突然孝助に斬掛ましたが大概の者なれば眞二ツ  
にもなるべき所あれども流石は飯島平左衛門の仕込で眞影流に達した腕前ことに用

意をした事ゆゑ夫れと見るより孝助は一步退さしが抜合す間もなき事ゆゑ大刀の鈍  
元にてパチリと受流し身を引く途端に伴藏がズルリと前へのめる所を腕を取て逆に  
捻倒し(孝)ヤイ〜曲者何ぞ致そ(曲者)〜イ眞平御免下さへまし(相川)ソラ出たか  
へ孝助怪我は無か(孝)〜イ怪我は御座ませんコリヤ狼藉者め何等の意恨で我に切付  
けたか次第を申せ(曲)〜イ〜全く人違ひでござへやすト小聲にて今此先で朋友と  
間違ひをした所が皆なが徒黨をして大勢で私を打殺すと云つて追驅けたものだから  
一生懸命に此迄は逃ては来たか目が眩んで居ますから殿様ども心付きませんでどん  
だ鹿匂を致しましたどうか御見逃しを願ひます其奴等に見付らると殺されますから  
早くお逃しなすつてくだされませ(孝)全く夫れに違ひないか(曲)〜イ全く違へござ  
へやせん(相川)ア、驚たコレ人違ひにも事によるぞ切て仕舞つてから人違ひで済む  
かべらぼうの實に稽いた良石和尚の御告げは不思議だなアオヤ今の騒ぎで重箱をど  
つかへ落して仕舞たど四邊を見廻して居る所へ依田豊前守の組下にて石子伴作金谷  
藤太郎といふ向人の御用聞が駈て来て孝助に向ひ懇懇に(捕方)〜イ申し殿様誠に有



難う存じます此者は御尋者にて舊悪のある重罪な奴でござりませ私共は彼所にて待受て居まして遂に取逃がさうとした所を旦那様の御蔭で容易くお取押へおされ難有ございますどうかお引渡しを願ひたう存じます(相川)そうか(彼は賊かい(捕方)大盗賊でございませ(孝)親父様呆れた奴でございませ此不埒者め(相川)なんだ人違ひだなど嘘をついて虚をつく者は盗賊の始まりナニどうに盗賊にモウ成て居るのだから仕方がない直に縄を掛けて御引きなさい(捕方)殿様の御蔭で容易く取押へ賊に難有う存じますどうか御姓名を承りたう存じます(相川)不埒人を取押へたとて姓名おぞを申すには及ばんコレ(重箱を落したから捜してくれア、これだ(危なかつたノウウ(孝)然し親父様何分悪人とは申しながら主人の法事の歸るさに縄を掛けて引渡すはどうか忍びない事でもございませ(相川)なれども左様申ては居られない渡し仕舞なさい早く引おされ捕方は伴藏を受取縄打て引立行き其筋にて吟味のす(相川)當の刑に行はれましたことはあにて分ります扱て相川は孝助を連れて我屋敷に歸り互に無事を悦び其夜は過て翌日の朝孝助は旅支度の用意の爲め小網町邊へ行て種々買

物をしやうと家を立出て神田旅籠町へ差懸る向ふに白き轎に人相墨色白翁堂勇齋とあるを見て孝助はハ、これが昨日良石和尚の教たには今日の八ッ頃には必ず逢たものに逢事が出来ると仰あつた占者だお敵の手掛が分り源次郎お國に廻り逢ふ事もやあらふか何にしる判断して貰ふと思ひ勇齋の門邊に立て見ると名人のやうではござりません竹の打ち付窓に煤だらけの障子を建て廊の板に人相墨色白翁堂勇齋と記て有ますが家の前杯は掃除杯した事はないと見へ塵だらけゆる孝助は足を爪立てながら中に入り(孝)おたのみ申す(白)おんだ誰だ明けてお入人履物を其所へ置くと盗まれるといけあから持てお上り(孝)ハイ御免下さいませと云ながら障子を明て中へ通ると六疊計りの狭い所に眞黒になつた今戸焼の火鉢の上に口のかけた土瓶を掛け茶碗がところがつている脇の方に小さい机を前に置き其上に易書を五六冊積み上げ傍への筆立には短き笹竹を立て其前に丸い小さを硯を置き勇齋は茫然と机の前に坐しましたさまは名人かは知らあいが少しも山も飾りもあひ爺々様くして居る故名人らしい事は更になけれども孝助は兼て良石和尚の教へもあればと



思つて下手を突かす(孝)白翁を引か先生は長老様でござりますかハイ始めましてお目に掛りませよ頭端は私だよ今年は最う七十だ(孝)夫は誠に御壯健な事て(白)マアくたつしやてございませお前は見て貰ひにでも来たのか(孝)ハイ手前は谷中新橋随院の良石和尚よりのお指揮で参りましたものでございませが先生に身の上の判断をしていたいきたうございませ(白)ハ、アお前は良石和尚と心安いかアレは名僧だよ智識だよ實に生佛だ茶は其處にあるから獨りで勝手に汲んでお上りハ、アお前は侍さんだぬ何歳だエ(孝)ハイ二十二歳でございませ(白)ハ、ア顔をとお出しと天眼鏡を取出し暫らくの間相を見て居りましたが大道の易者のやうに高慢は云はずハ、アお前さんはマア〜家柄の人だシテ是迄目上に縁なくして誠にどうも一々苦勞ばかり重なつて来るやうな譯に成つたの(孝)ハイ仰の通りどうも目上に縁がございませ(白)其處でどうも是迄の身の上では薄氷を踏むが如く刃の上を渡る様を境界で大いに千辛万苦をした事が顯はれて居るがそうだらふの(孝)誠に不思議實に能く當りました私の身の上には危い事ばかりでございませ(白)夫れでお前には望みがある

である(孝)ハイと在まそが其望みは本意が遂げられませうか如何でございませ(白)留事は近く遂げられるが其處の所がチト危険な事てこれと云ふ場合に向たなら水の中でも火の中でも向ふへ突切る勢ひがなければ必大望は遂げられぬが先退くに利あらず進むに利あり斯ういふ所で悪くすると斬殺されるヨどうも剣難が見るが口く火の中水の中を突切て仕舞へば廣々とした所へ出て何事もお前の思ふ様になるが夫れは六ツかしいから氣を注げなけりやいけないうも是切り見る事はないからお前(孝)ハイそれに就きまして私族より尋る者がございませがこれはどうしても違ない事とは存じて居ませが其者の生死は如何でございませう御覽下さいませ(白)ハ、ア見せなさいと又相して(白)ハ、是は目上だぬ(孝)ハイ左やうでございませ(白)これは違て居るぜ(孝)い、エ逢ひません(白)イヤ逢て居ませ(孝)尤も今年より十九年以前に別れましたるゆゑ途中で逢ても顔も分らぬ位でありますから一所に居りましても互ひに知らずに居りましたかな(白)イヤ〜何ても逢て居ませ(孝)幼稚時分に別れましたから殊に寄たら往來ですれ違つた事もございませうが逢た事は



御座いません(白)イヤ〜さうじやない儘かに逢て居る(孝)それは幼稚い時分の事  
 故(白)ア、ウルサイイヤ逢て居るト云ふのに外にはなにも云ふ事はあい人相に出て  
 いるから仕方がない屹と逢て居る(孝)それは間違ひでございませう(白)間違ひでは  
 ない極めた所を云つたのだそれより外に見る所はない晝寝をするんだから歸つてお  
 呉れどそつけあく云れ孝助は跡が細かく聞たいからもじ〜として居ると亦門口より  
 入来るは女連れの二人にて(女)ハイ御免下さいませ(白)ア、又來たか晝寝が出来ね  
 へチ、二人りか何個は供だそんなら其所に待して此方へお上り(女)ハイ御免被下  
 ませ先生の御名を承りまして参りましたどうか常用の身の上を御覽を願ひます(白)  
 ハイ此方へ御出でと又此女の相をよく〜見てこれはわるい相だなアお前はいくつ  
 だへ(女)ハイ四十四歳でございませ(白)これはいかん最見るがものはいひどい相  
 だ一体お前は目の下に極縁のあい相だそれに近々の内急度死ぬ死のだから外にな  
 んにも見る事はないト云れて驚き暫らく思案を致しまして(女)命数は限りのあるもの  
 で長い短いは致方が御座いませんが私は獨り尋ねる者がございませそが其者に逢ない

て死にまゝ事でご座いませうか(白)フワンこれは逢て居る譯だイ〜逢ません尤も幼  
 年の折に別れましたから先でも私の顔を知ず私も忘れた位お事でもそれ違つたくらひで  
 は知れません(白)何んでも逢て居まゝ最うそれで外に見る所も何もない(女)其者は  
 男の子で四ツの時に別れた者でございませすがといふ側から孝助は若しやそれ歎と彼  
 女の側に膝をすりよせ(孝)モシお内室様へ少々伺ひますが何れの方かは存じません  
 が只今四ツの時に別れたと仰しやいますその人は本郷丸山あたりで別れたのではご  
 ざいませんかそして貴女は越後村上の内藤紀伊守様の御家來澤田右門様の御妹子で  
 はございませんか(女)オヤマア能く知てお出でを誠にハイ〜(孝)そして貴女の御  
 名前はありる様どかつしやつて小出信濃守様の御家來黒川幸藏様へお片附にあり其  
 後御離縁になつた御方ではございませんか(女)オヤマア貴郎は私の名前までお當て  
 ますつて大さう御上手様これは先生の御弟子でございませるか云に孝助は思はず側  
 により孝〜チ、お母様お見忘れで御座いませうが十九年以前手前四歳の折お別れ申  
 た昔の孝助めでござい升(女)オヤマアどうもママお前がアノ悻の孝助かへ(白)夫が







だから先きから逢て居る〜と云のだからゑは嬉涙を拭ひ(りゑ)どうもマア思がけ  
まい實に夢のやうな事でございませうして大層立派にお成りだ斯う云ふ姿になつ  
て居るのたものを表で逢たつて知れる事じやアありませぬ(孝)實に神の引合せで  
ございませぬ母様お懐しうございませぬ私には昨年息後の村上へ参り段々御様子伺ひ  
まそれば澤田右門様の代も替りお母様のいらつしやいます所も知れませぬからどう  
かなしてお目に懸りたいと存じて居ましたに計らず爰でお目に懸り先づお壯健でい  
らつしやいまして斯を嬉しい事はございませぬ(りゑ)よくマア嘸お前は私を怨んで  
おいでだらう(白)そんな断を爰でしては困るわ十併し十九年ぶりで親子の對面嘸  
があらふがいらざる事だが供に知れても宜くない事もあらふから何所か待合か何か  
へ行てするがい(孝)ハイ先生お蔭さまで誠に有難うございませぬ(りゑ)良石様のお言葉  
と云ひ貴老様の人相のお名人と申し實に驚き入りました(白)人相が名人といふわけ  
もあるまへが皆かうなつて居る因縁だから見料はいらねへから歸りなナニ些とばか  
り置て行かそれもよからう(りゑ)種々お世話様有難う存じました孝助や種々咄しも

したい事があるからこふしやう私は今馬喰町三丁目下野屋と云ふ宿屋に泊つて居る  
からお前より一ト足先へ歸り供を買物に出すから其跡へ供に知れまいやうに上つて  
おゐて(白)嘸嬉しからうのう(孝)さやうならばこれから直見へ隠れにお母様のお跡  
に付て参りませうそれはそうと云つゝも懐中より何ほどか紙に包んで見料を置き厚  
く禮を述べ白翁堂の家を立出で見へ隠れに跡をつけ馬喰町へ参り下野屋の門邊に佇  
立み待て居るうちに供の者が買ものに出で行ましたから孝助は宿屋に入り下女に案  
内を頼で奥へ通る(りゑ)サア〜〜此所へ來ナほんどうにマアどうもねへト云ひ  
ながら孝助をつく〜見て見忘れはしませぬ幼顔お前の親御孝藏どのに能く似てお  
いでだよさうして大そう立派におなりだねへお前がお爺様の跡を繼で今でもお爺様  
はお存生でいらつしやるか(孝)ハイお母様此 兩隣の座敷には誰も居りは致ませ  
んか(りゑ)イ、へ私も着て間もないのだが晝の中は皆な買物や見物に出かけてしも  
うから誰も居ないよ日暮方は大勢歸つて來るが今は留守居が晝寝でもして居る位だ  
らうヨ(孝)フウはやうから申上ますがお母様は私の四ツの時二月にお離縁にな



りましたのもお親父様があゝの通りの酒亂からでそれからお親父様は其年の四月十一  
 日本郷三丁目藤村屋新兵衛と申す刀屋の前で殺害され安残を死をお遂げなされまし  
 た(りゑ)オヤマア矢張り酒ゆゑでそれだから私ア最うお前のお爺父さんでは眞  
 成に苦勞を仕ぬいたよ那時もお前と云ふ可愛子があることだから別れたいのではあ  
 いが兄が物堅い氣性だから那様者へ付ては置れん酒故に主家をお暇に成やうお者に  
 は添せて置んと無理無体に離縁を取たがお行衛の事は此年月忘れたことはありませ  
 ぬそうしてお親父様が亡ては跡で誰もお前の世話をとる者がなかつたらう(孝)サ  
 アお親父様の店受彌兵衛と申しまゝする者が育て呉私 が十一の時にお前の親父さん  
 は是くで死だと咄して呉ました故私 も假令今は町人に成ては居まゝと者の元は武  
 士の子ですから成人の後は必ず祖父様の仇を報たいと思ひ詰屋敷奉公をして劍術を  
 覺たいと思つて居ましたに縁有て昨年の三月五日牛込軒子阪に住む飯島平左衛門と  
 つしやるお廣敷番の頭をお勤になる旗本屋敷に奉公住をいたした所其主人が私を  
 ば我子のやうに可愛がつて呉れましたゆゑ私 も身の上を明し親の仇が討ちたいか

らどうか劍術を教へて下さいと頼ましたれば殿様は御番勞れのお厭もあく夜までか  
 けてと劍術を仕込んで下されました故思ひ懸なく免許を取までになりました(りゑ)  
 オヤ左様フウゾ(孝)すると其家にお國と申す石使がりましたこれは水道端の三  
 宅の御殿様が殿様へと縁組にある時に奥様に附て來た女でございませすが其後奥様が  
 お隠れになりましたものですから此お國にお手がつきお妾とかりました所隣家の族  
 本の次男宮野邊源次郎と不義を働き内々主人を殺さうと謀みましたが主人は素より  
 手者の事故容易に殺すとは出來ないから中川へ網船に誘ひ出し船の上から突落して  
 殺さうといふ事を私 が立聞しましたゆゑ源次郎おくにを密かに殺し自分は割腹し  
 てもどうか恩ある御主人を助けたと思ひ昨年の八月三日の晩に私 が鎗を持って庭  
 先へ忍び込み源次郎と心得突懸けたは間違ひで主人平左衛門の助を深く突きました  
 (りゑ)オヤマアとんだ事をふしだね(孝)サア私 も驚ひて氣が狂ふばかりに成り  
 ましと主人は庭へ下て來てひそくと私への懺悔咄しに今より十八年前の事貴様  
 の親父を手に懸けたは此平左衛門が未だ部屋住にて平太郎と申した昔の事どうか其



方の親の仇と名乗り貴様の手に懸りて討りたいとは思へども主殺の罪に落すを不便に思ひ今日までは打過たが今日こそ好折からなれば斯く故と源次郎の態をして貴様の手にかけり猶委細の事は此書置に認め置たれば跡の始末は養父相川新五兵衛と共に相談せよ貴様はこれにて怨を晴して呉れ然る上は仇は仇恩は恩三世も替らぬ主従と心得飯島の家を再興してくれろ急いで往と急ぎ立てられ養家先なる水道端の相川新五兵衛の家へ参り舅と共に書置を開て見れば主人は私を出した跡にて直に客間へ忍び入源次郎と鎗仕合をして源次郎の手に懸り最後をしようと認めてありました書置の通りに遂に主人は其晩果敢なくおありおされました又源次郎お國は必らず越後の村上へ立越すべしとの遺書にありすから主の仇を報はん爲め養父相川ども申合せ跡を追懸けて出立致し越後へ参り諸方を尋ねましたが一向に見當らず又尊母の事も尋ね申しましたが之れも分りません故餘義なく此度主人の年回をせん爲めに當地へ歸りました所不圖今日御面會を致しませんとは不思議な事でございますト聞て驚き小聲に成(りゑ)オヤマア不思議な事じやアないかアノ源次郎とお國は私の家に懸

匿てありますヨどうもマアあんたる悪縁だらう不思議だねへ私が廿六の時黒川の家を離縁になつて國へ歸り村上に居ると兄が頻りに再縁しろと勧め不思議な縁で御出入の町人で荒物の御用を達す廻の口屋五兵衛と云ふもの、所へ縁付くと其所に十三になる五郎三郎と云ふ男の子と八ッに成るお國といふ女の子がありまして其お國は年は行ぬが意地のわるいとも性の悪い奴で夫婦の相中を突つて仕様がなから十一年の歳江戸の屋敷奉公に遣た先は水道端の三宅といふ旗本で其後奥様附で牛込の方へ往たとはかりで跡は手紙一本も寄越ぬ位實に酷い奴で夫五兵衛殿が亡つた時も訃音を出したに歸りもせず返事もよこさぬ不孝もの兄の五郎三郎も大層に腹を立て居ました其後私共は子細有て越後を引拂ひ宇都の宮の杉原町に來て五郎三郎の名前で荒物屋の見世を開いて最早七年居升がツイ先達てお國が源次郎と云ふ人を連れて來ていふのには私が牛込の或る御屋敷へ奥様附で行た所が若氣の至に源次郎様と不義淫行故に此お方は御勘當と成私故に今は路頭に迷ふ身の上だから誠に濟無事だが隠匿つて呉れろと云つてそんな人を殺した事なんぞは何とも云わなから源次郎



への義理に今は宇都宮の私の内に居るよ私は此間五郎三郎から小遣を貰ひ江戸見物に出掛けて来て未だこちらへ若て間も無くお前に巡り逢て此事が知れるとは何たる事だね(孝)ではお同源次郎は宇都宮に居ますかツイ鼻の先に居る事も知らないで越後の方から能登へかけ尋ねあぐんで歸つたとは誠に残念な事でございませうからとございませうお母様がお手引をして下さつて仇を討ち主人の家の立行くやうに致したいものでございませう(りゑ)夫は手引をしてあげやうともサそんなら私は直にこれから宇都宮へ歸るからお前は一所にお出だが茲に一ツ困つた事があると云ふものは那の供が居るから是を聞付け潰られるとお同源次郎を取逃すやうな事にあらうも知れぬから斯うと思案して私は明朝供を連れて出立するから今日やうにお前が見へ隠れに跡を遁て来て休む所も泊る所も一ツ所にして互に口をさかず知らぬ者の様にして置て宇都宮の杉原町へ入つたら供を先へ遣つて置てそうして兩人で相圖を謀し合したら位らうね(孝)お母様有難う存じますそれではどうかそういふ手筈に願ひどう存じます私はこれより直に宅へ歸つて舅へ此事を聞かせたならどのやうに悦びませう左や

うなら明朝早く参つて此家の門口に立て居りませうそれからお母様先刻ツイ申上げ残しましたが私は相川新五兵衛と申者の方へ主人の媒酌で養子に参り男の子が出来ました貴母様には初孫の事故お見せ申したいが此度はお取急ぎでございませうから何れ本懐を遂げた跡の事にいたしませう(りゑ)オヤそうかへそれは何にしても目出度事です私も早く初孫の顔が見たいよそれに就てもどうか首尾能くお國と源次郎をお前に討せたいものなのだから宇都宮へ往ば私がよき手引をして屹度兩人を討せるからと互に辭を誓へ孝助は暇を告げて急で水道端へ立歸りました(相川)オヤ孝助殿大そう早くお歸りだいろ〜お買物が有たらう子(孝)イエ何も買ひません(相)おんの事だにも買はずに來たそんなら何か用でも出來たか(孝)お父様どうも不思議な事がありました(相川)ハ、随分世間には不思議な事も有るものでねへ何か兩國の川の上に黒氣でも立たのか(孝)左やうではございませんが昨日良石和尚が教へて下さいました人相見の所へ参りました(相川)成程往たかへそうかへ名人だとかアお前の身の上判断は旨くあたつたか〜(孝)〜イ良石和尚が申た通私の身



の上は劍の上を渡る様もので進むに利あり退くに利あらずと申して良石和尚の  
お言葉と聊か違ひはござりません(相川)違ひませんか成程智識と同じ事だそれから  
へいそれから何んの事を見て貰たか(孝)それから私が本意を遂げられませうかと  
聞くど本意を遂げるは違からぬうちだが通れ難い劍難が有ると申しました(相川)へ、  
一劍難が有と云ましたかそれは極心配にある又昨日のやうな事があると大變だから  
ねへ其劍難はどうかして通れるやうお御祈禱でもして遣ると云つたか(孝)イエ左や  
うな事は申しませんが貴所も御存の通り私が四歳の時別れました母に逢ませうか  
逢へますまいかと聞くど白翁堂は逢て居ると申しますから幼年の時別れたる故途  
中で逢ても知れぬ位だと申しても何でも逢て居ると申し道に争ひにありました  
(相川)ハアその所は少し下手糞だ併し當るも八卦あたらぬも八卦そう身の上も何  
もかも當りはしまいが強情を張て胡麻かさうと思つたのだらうが其所の所は下手糞  
だなんと云てやりましたか下手糞とか何とか(孝)すると此から獨り四十三四の女  
が参りましてこれも尋る者に逢るか逢ないかと尋ねると白翁堂は同じく逢て居ると

いふものだから其女は赤に逢せんとといへば急度逢て居ると又争ひにありました  
(相川)ア、コリヤからツべた眞に下手だがそう當る譯のものではないそれには白翁  
堂も耻をかいたらうお前と其女と二人で取て押へて遣つたかそれからどうした(孝)  
サア餘り不思議な事で私も心にそれと思ひ當る事もありませんから其女にはおろ  
様と仰しやいませんかと尋ねました所がそれが全く私の母でございまして先きで  
も吹驚きました(相川)ハ、ア其占は名人だ子驚ひたねへ成程フンはより孝助はお  
國源次郎両人の手懸りが知れた事から母と謀し合はせた一伍一什を物語りませると  
相川も吹驚もいたし又悦び實に天から授かつた事あれば速に明早朝後ぬ様に出立  
して目出度本懐を遂げて参れといふ事にありました翌朝早天に仇討に出立を致し是  
より仇討は次に申上ます

第廿一回

正邪共泣慈母之義  
辛苦初復恩人之仇

孝助は隔らすも十九年ぶりに實母かりぬに廻り逢ひまして馬喰町の下野屋と申す



宿屋へ参り互ひに慰し身の上の物語を致して見ると思ひがけなき事にて母方にお目  
源次郎が匿まはれてある事を知り誠に不思議の思ひをなしました處母が手引をして  
仇を討たせて遣うとの言葉に孝助は飛立ばかり急ぎ立歸り右の次第を養父相川新五  
兵衛に咄しまして六日の早天水道端を出立し馬喰町なる下野屋方へ参り様子を見て  
居りますると母も兼て約したる事成れば身支度を整のへ下男を供に連れ立出ました  
れば孝助は見へ隠れに跡を付けて参りましたが女の足の抄取らず幸手栗橋古河真間  
田雀の宮を跡になし宇都宮へ着ましたは丁度九日の日の暮々に相成ましたが宇都宮  
の杉原町の手前まで参りまると母ありゑは先下男を先へ歸へし五郎三郎に我が歸り  
し事を知らせてくれると云付やり孝助を近く招き寄まして小聲になり(母)孝助や私  
しの宅は向ふに見へる紺の暖簾に越後屋と書き山形に五の字を印したのが私の内だ  
よめの先に板塀があり付て曲ると細い新道のやうな横間があるから夫へ曲り三四軒  
行くと左側の板塀に三尺の開きが付てるがそれから這入れば庭傳ひ右の方の四疊半  
の小座鋪にお國源次郎が隠れ居る事ゆゑ今晚私が開きの栓を明けて置くから九時の

鐘を合圖に忍び込めば袋の中の鼠同様覺られぬやう致すがよい(孝)ハイ誠に難有ぞ  
んじまする圖らずも母様の御蔭にて本懐を遂げ江戸へ立歸り主家再興の上私は相川  
の家を相續致しますればお母様を御引取申て必ず孝行を盡す心得左すれば忠孝の道  
も全ふする事が出来誠に嬉しう存トまると左やうなれば私は何方へ参つて待受て居ま  
せう(母)そふさ池上町の角屋は堅といふ評判だからわれへ参り宿を取ておいで九ツ  
の鐘を忘れまいぞ(孝)決して忘れません左やうなればと孝助は母に別れて角屋へ参  
り九ツの鐘の鳴るのを待受けて居ました母は孝助に別れ越後屋五郎三郎方へ歸りま  
すと五郎三郎は大きに驚き(五郎)大層御早く御歸りに参りました未だめつたには御  
歸りにはならぬと思つて居ましたのに存じの外に御早うござりましたそれでは迎  
も御見物は出来ませんでございましてたろふ(母)ハイ私は少し思ふ事があつて急に  
國へ歸る事に参りましたから奉公人共への土産物も取て居る間もない位で(五郎)ア  
レサ何左様御心配があるものでございませうおかさまは芝居でも御見物なとつて御  
歸りに参る事だらふから中々一ヶ月や二ヶ月は故郷忘れ難して彼地此地を御廻りな



さるから急にはお歸りになるまいと存じましたに母) サア御前に貰つた旅金の残り  
 だからむやみに遣つては濟まいがどふか皆なに遣つておくれよと奉公人銘々に包  
 んで遣はしまして其外若古した小袖半纏などを取分け(五郎) そんなに遣らなくつて  
 も宜しうございませすと申すに(母) ハテこれは私しの少々心あつての事でつまらん物  
 だが若古しの半纏は女中にも色々世話に成りますから遣ておくれシテお國や源次郎  
 さんは矢張奥の四疊半に居りますか(五郎) 誠にわれは御母様に對しても置かれた義  
 理ではございませぬ憎い奴でございませすが強て絶り付て参り私故に御隣屋鋪の源次  
 郎さんが勘當をされたと申すから義理で據所なく置きましたもの、嘸尊母はお厭  
 でございませう(母) 私はお國にあつて緩くり咄しがしたいから用もあるたろうが例  
 もより少々見世を早くひけにして寝かしておくれ私は四疊半へ行て國や源さんに咄  
 しがあるのだが是で御酒やお肴を(五郎) およし遊ばせ(母) イヤそうでない何も買て  
 來ないからせひ上げておくれよ(五郎) ハイ、と氣の毒さうに承知して五郎三郎は母  
 の云付なれば酒肴を詠へ四疊半の小間へ入れ鋪の奉公人も早く寝してしまひ母は四

疊半の小間に來りて内にはおれば(國) チャお母様大そう早く御歸り遊しました私  
 未だめつたにお歸りにはなりませんと思ひ屹度一ト月位は大丈夫御歸りにはお  
 ないし御咄ばかりして居りました大そふ御早くほんとうに喫驚り致しました(源) 只  
 今は御土産として御酒肴を澤山に有難うぞんじます(母) イエ、なんぞ買つて來やう  
 と思ひました下誠に念ぎましたゆゑ何も取て居る隙もありませんでした誰も外に聞  
 て居る人もないやうだから打解けて咄しをしなければおらない事があるがお國やお  
 前が江戸の御屋敷を出た時の始末を隠さずに云ておくんさい(國) 誠に恥かしい  
 事ではございませすが若氣の誤り此源さまと馴染めた所から源さまは御勘當になりまし  
 て行所のないやうにしたは皆お私ゆゑと思ひ悪い事とは知ながら御屋鋪を逃出し源  
 さまと手を取り合ひ日頃無沙汰を致した兄の所に便り今ではこうやつて厄介にあつ  
 て居ます(母) 不義淫奔は若い内には随分ありうちの事だがお國お前は飯島様のお  
 屋敷へ奥様付にあつて來たが奥様がおかくれになつてから殿様のお召遣ひになつて  
 居るうちに御隣の御二男源次郎さまと隣りずからの心安さに折々御出におる所から



お前は此源さまと不義密通を働いた末お前方が申し合せ殿様を殺し有金大小衣類を盗み取りた屋敷を逃て御出だらふがナト云はれて二人は顔色變へ(國)チャマア賊鷲にしますお母様何を仰いませぬ誠が其様お事を云ひましたか少しも身に覺へのおい事を云ひかけられ眞實に驚愕致しませぬ(母)イエ、いくら隠してもいけないよ私の方にはちやんと証據がある事だから隠さずに云つておしまひ(國)そんな事を誰が申しましたらうねへ源さまト云へば源次郎落付ながら(源)誠に怪からん事でも御母様モシ外の事とは違ひませと手前も宮野邊源次郎何ゆる御隣りの伯父を殺し有金衣類を盗みしなど、何者が左やうお事を申しました毛頭覺へはございませぬ(母)イヤ、それ仰いませぬが私しは江戸へ参り不思議と久し振りで逢はせました者が有て其者から承はりました(源)フウツア何者でございませぬ(母)ハイ飯島様の御屋敷で御草履取を勤て居ました孝助と申す者でなア(源)ム、孝助那奴は不届至極お奴で(國)アラ那奴はアア憎い奴で御主人様の御金を百兩盗みままた位な者ですからどんな拵らへ事をまたか知れませぬ那樣な者の云言を御母取上げてはいけませぬどうして草履取が

奥の事を知て居る譯はございませぬ(母)イエよお國やその孝助は私の爲には實の悴でございませぬト云はれて兩人は驚顔して跡へもぢくどさがり(母)サア私が此家へ縁付て来たのは今年で丁度十七年前の事元私の連合は小出様の御家來で御馬廻り役を勤め百十石頂戴致した黒川孝藏といふ者でありましたか亂酒ゆるに屋敷は追放本郷丸山の本妙寺長屋へ浪人して居ました處私の子澤田右門が物堅い氣質で左様お酒癖わしき者に連添て居よりは離縁を取て國へ歸れど強て迫られ兄の云に是非もかく其時四ツにる悴を跡に残し離縁を取て越後の村上へ引込み二年程過ぎて此家に再縁して参りませしたか此度江戸で圖らずも十九年ぶりにて悴の孝助に逢ましたか實の親子でありますゆゑ段々様子を聞てみるとお前達は飯島様を殺したうへ有金大小衣類まで盗み取り御屋敷を逐電したと聞き私に吃驚しましたよ夫れが飯島様の御家は改易に成ましたから悴の孝助が主人の仇の御前方を討なければ飯島の家名を起す事が出来ないから仇を捜す身の上と涙ながらの物語りに私も十九年ぶりで實の子に逢ました嬉し紛れに仇のお國源次郎は私の家に匿まつてあるから手引をして



仇を打たせてやらふとサうつかり云たは私の誤り孝助は血を分た實子あれども一旦  
 離縁を取れば黒川の家の子此家に再縁する上からは今はお前へは私の爲めに猶さ  
 ら義理ある大切の娘なりや縁の切れた悻の情に引かされて手引をしてお前達を討た  
 せては亡ぢられたお前親御樋口屋五兵衛殿の御位牌へ對してどうも義理が立たせ  
 んから悪い事を云ふたどうしたら宜からうかと道々も考へて來ましたが孝助は跡に  
 り先になり私に附て此地に参り實は今晩九時の鐘を合圖に庭口から此家に忍んで  
 來る約束討せては濟ないからお前達も隠さず實はこれ〜と云こへそれは五郎三郎  
 から小遣ひに貰つた三十兩の内少し遣つて未だ二十六七兩は残つてありますからこ  
 れをお前達に路銀として饞別にあげやうから少しも早く逃のびるさい立退く道は宇  
 都宮の明神様の後ろ山を越へ慈行寺の門前から付て曲り八幡山を抜てなだれに下り  
 ると日光街道それより鹿沼道へ一里半行は十郎ヶ峯といふ所夫よりまた一里半あま  
 り行けば鹿沼へ出まそ夫先は田沼道奈良村へ出る間道人の目つまにかゝらぬ抜路  
 少しも早く逃げのびて何國の果ありとも身を隠し悪い事をしたと氣がつきましたら

髪を剃て二人とも袈裟と衣に身を纏し殺した御主人飯島様の追善供養致したから命  
 の助る事もあらうが只不便なのは悻の孝助仇の行末の知れぬ時は一生旅寢の艱難困  
 苦御主の御家も再興せせん氣の毒を事と氣がついたら心を入かへ善人に成ておくれ  
 よサア〜早くと路銀まで出しまして義理をたてぬく母の實心流石の二人も面目な  
 く目と眼を見合せ(國)ハイ〜誠にどうも左様とは存じません御隠し申したのは  
 濟みません(源)實に御信實を御言葉恐れ入りました拙者も飯島を殺と氣では御座ら  
 んが不義が顯はれ平左衛門殿が手鎗にて突てかゝる故止むを得ず斯の如きの仕合で  
 ございます仰にて従ひ早々逃延改心致して再びお禮に参りますのでございますコ  
 ンお國や御儀別として旅銀までおだに心得ては濟ませんよ(國)お母様どうぞ堪忍して  
 くださいましよ(母)サア〜早く行ぬか彼是最はや九ツになり升と云はれて二人は  
 支度をしてゐると後ろの障子を開てはいりましたはお國の兄五郎三郎にて突然お國  
 の側へより(五郎)御母様少し御待あすつてくださいいコノ國これへ出る〜眞實にマ  
 ア呆れ果て物が云はれねエ奴だ内へ尋ねて來た時何んど云た御隣りの次男と不義を



したゆゑ源さんは御勘當にふり身の置所がよいやうにしたも私ゆゑ御氣の毒でならねへから一所に連れてきましたなど、生慮を遣つて我をだました十内に斯やつて置く奴じやアねエぞ御父様が御死去に成た時幾度手紙を出しても一通の返事もよこさぬくらいお人でなし只一人の妹だか死んだと思つて諦めて居たのだそれなのにめくくど尋ねて来やアがつて置てくれるといふからよもや人を殺し泥棒をして来たとは思わねへから置いて遣れば今聞けば實に呆れて物がいはれぬエ奴だお母様誠に有難ふございまするが尊母が親父へ義理をたて、此奴等を逃してくださいますしても天命は遁れられませんから迎も助かる氣遣ひはございません寧ろ黙つて御出でなすつて孝助様に切られてしまふ方が宜しうございませぬにヤイお國御母様は義理堅い御方ゆゑ親父の位牌へ對して路銀までくださつて其上逃道まで教へてくださると云は十實に有難事ではないか何とも申うら様はございませぬコレお國此罰當りめへ御母様が此家へ嫁にいらつしやつた時は手前が十一の時たがいぢがわるくて御父様と御母様と我どの相中を突き何分家が揉めて困るから我が御親父さんに勸めて他人の中を見せ

なければいけませんか近い所だと騙出して歸つて来ますから寧ろ江戸へ奉公に出した方がよからうと云て江戸の屋備奉公に出した所が善事は覺へねへで密夫をこしらへて御屋敷を逃げ出すのみならず御主人様を殺し金を盗みこといふは呆れ果て、物が云われぬお母様が並の人ならば知らぬふりをしてお出でなすつたら今夜孝助様に切殺されるのも心から大罰で手前達は當然だが坊主が憎けりや袈裟までの譬で此奴も仇の片割と我まで殺される事を仕出來すといふは不孝不義の狗畜生め只一人の兄妹なり殊にやア女の事だから此兄の死水も手前が取るのが當然だのに何の因果で此様悪婦が出來たらう御親父様も正直な御方私しも是迄左のみ悪ひ事を仕た覺へは無いのに此様な悪人が出來るとは實になさけあい事でございませぬ此畜生めくくくサツサと早く出て行けと云われて二人とも這々の体にて荷拵へをなし暇乞ひもそこく越後屋方を逃出しましたが宇都宮明神の後ろ道にかゝりやすと晝さぬ暗き八幡山現て真夜中の事でございませぬから二人は氣味わるく路の中場迄參ると一叢茂る杉林の蔭より出て參る者を透して見れば面部を包みたる二人の男子突然源次郎の







前へ立塞り「ハイ神妙にしる身ぐるみ版で置て行け手前達は大方宇都宮の女郎を連出した欠落者だらう」ヤイ金を出さないかと云れ源次郎は忍び姿の事をれば大小を落し差にして居ましたたが此様子にハツと驚き拵指にて鯉口を切り慄へ聲を振立て

(源)手前達は何だ狼藉者と云ながら透して九日の夜の月影に見れば一人は田中の仲間暗唾の鰐藏見紛ふ方なき面部の古疵一人は元召使ひの相助なれば源次郎は二度喫驚(源)コレ相助ではふいか(相)コレハ御次男さま誠に暫く(源)マア安心した眞實に喫驚した(國)私も喫驚して腰が抜けた様だつたが相助さんか(相)誠にへい面目ありません(源)手前は未だ斯様な悪い事をして居るか(相)實は御屋敷を御殿に成て藤田の時藏と田中の龜藏と私と三人揃つて出やしたたが何所へも行所はふしどふしたらよからうかと考へながらぶらぶらと宇都宮へ参りやして雲介になりどうやらこうやらやつて居るうち時藏は傷寒を煩つて死んでしまひ金はあくあつて来た處からツイふらふと出来心で泥棒をやつたが疾付とあり此間道は能く宇都宮の女郎を連れて鹿沼の方へ欠落する者が時々あるのでこゝに待伏せしてサア出せと一ト言いへば私

しは劍術をしらぬへでも怖がつて直に置て行くやうな弱い奴ばつかりですから今日も迂濶源さまと知らず掛りましたたが貴郎に抜かれりやヤあッ切られてしまふ處誠にあんどもはや(源)コレ龜藏手前も泥棒をとするのか(龜)へい雲介を仕ていやしたたが碌を酒も呑めぬへから太く短くやつつけと今では斯様な事をしておりやすと云はれ源次郎は暫し小首を傾げて居ましたたが好所で手前達に逢た手前達も飯島の孝助には還恨があらうな(龜)エーある所トやヤありやせん川の中へ投げ込まれ石で天窓を打裂き相助と二人ながら大曲りでは酷い目に逢ひ這々の体で逃げ歸つた處が此方は御殿孝助はぬくぬくと奉公して居るといふのだ今でも口惜くつて堪りませんが那奴はどうしました(源)誰も外に聞て居る者はなからうな(相)へい誰が居るものですか(源)此國の兄の宅は杉原町の越後屋五郎三郎だから暫くあすこに匿まはれて居た處母といふのは義理ある後妻だが不思議な事で夫が孝助の實母であること此間母が江戸見物に行た時孝助に廻り逢ひ悉しい様子を孝助から残らず母が聞取り手引をして我を打たせんと宇都宮へ連れては来たが義理堅い女だから亡父五兵衛の位牌へ對し



てお國を討たしては濟あいなといふ所で路銀迄貰ひ斯うやつて立たせてはくれたもの  
、其所は血肉を分けた親子の間に寄ると跡から追掛けさせ遣て来まいものでもな  
いがどふしてか手前らが加勢して孝助を殺してくれ、ば多分の禮は出来ないが二十  
金やらうじやないか(龜)宜しうございやす隨分やつつけやせう(相)龜藏安受合する  
なよ那奴と大曲で喧嘩した時大渠の中へ投げ込まれ水を喰つて漸逃歸つたくらる  
那奴ア途方もなく劍術が旨いから迂濶打ち合ふと叶やアしさい(龜)それは又工夫が  
ある鐵砲じやア仕様があるめへ十郎が峯あたりへ待受け源さまは清水流れの石橋の  
下へ隠れて居て已等達やア林の間に身を隠して居所へ孝助が遣て来りやア橋を渡り  
切た所で我が鐵砲を鼻ツ先へ突付けるのだ孝助が驚いて跡へさがれば源さまが飛出  
して切付りやア狭み打ちわさアねへ遁るも引くも出来アしねへ(源)シャアどうか工  
夫をしてくれる何分頼むと是れから龜藏は何所からか三挺の鐵砲を持って参り皆々連  
立ち十郎が峯に孝助の来るを待受けました

第二十一回ノ下

却説相川孝助は宇都宮池上町の角屋へ泊り其晩九ツの鐘の鳴るのを待ち掛けました  
所最う今にも九ツだらうと思ふから刀の下緒を取りまして襷といたし裏と表の目釘  
を濡し養父川新五兵衛から譲受けた藤四郎吉光の刀をさし主人飯島平左衛門より  
遺物に譲られた天正助定を差添といたしまして橋を渡り板垣の横へ忍んではいりま  
すと三尺の開き戸が明いて居ますからハ、ア之は母が明けて置てくれたのだなど忍  
んで行きますと母の云ふ通り四疊半の小坐敷がありますから兩戸の側へ立寄り耳を  
寄せて内の様子を窺ひますと家内は一体に寢静まつたと見へ奉公人の駈の聲のみ寂  
どいたしまして池上町と杉原町の境に橋がありまして其下を流れます水の音のみ  
たして居ります孝助は最う家内が寢たかと耳を寄せて聞きますと内では小聲で念佛  
を唱へて居る聲がいたしますからハテ誰か念佛を唱へて居るものがあるそうだなと  
思ひながら兩戸へ手を掛けて細目に明けると母のありゑが念珠を爪繰りまして念佛を  
唱へて居るから孝助は不審に思ひ小聲になり(孝)母上さまこれはお母様のお寢間で  
御座いますか万一場所を取違へましたか(母)ハイ源次郎お國は妾が手引きをいたし



まして我に逃がしやしたとよ云はれて孝助は喫驚し(孝)エ、お逃し遊ばしやしたと母ハイト九年ぶりでお前に逢ひ懐かしさの餘り源次郎お國は妾の家へ隠匿てあるから手引きをして私が討たせると云たのは女の淺慮お前と道々來ながらもお前に手引きをして兩人を討たしては私が再縁した樋の口屋五郎兵衛殿に濟まないと考へおがら來ました今此の家の主人五郎三郎は十三の時お國が十一の時から世話になりましたから實の子も同じ事お前は離縁をして黒川の家へ置いて來縁のあい孝助だから兩人を手引をして逃がしましたそれは全く私がしたに違ひないからお前は仇の縁に繋がる妾を殺しお國源次郎の跡を追掛けて勝手に仇をお討ちなさいと云はれ孝助は呆れて(孝)エ、お母様それは何ゆゑ縁が切れたと仰いませ成程親は亂酒で御座いますから尊母も愛想が盡きて私の四ツの時に置いてお出になつた位ですからよくの事でお怨み申しませんが私は縁は切れても血統は切れぬ實の母上様私は物心が付まして母上様はお達者か御無事でお出かど案じて計り居りました所此度圖らずお目に掛りましたのは日頃神信心をしたお影だ殊に尊母がお手引をなさつてお國源次郎

を討たせて下さると仰つたから此上も無い難有事と喜んで居りましたそれを今晩に至てお前には縁があれ越後屋に縁があるわか他人に手引をする縁がないと仰るはお情けない左様なお心から江戸表に居る内にあせこれくと明かしては下さいません私も仇の行術を知らなければ知らぬありに又外々を捜し假令草を分けてもお國源次郎を討たずには置きませんそれをお逃がし遊ばしては假令今から跡を追かけて往きましても兩人は妾を變へて逃げますから私には討てませんから主人の家を立てる事は出来ません縁は切れても血統は切れません縁が切れても血統が切れても宜しう御座います之餘りの事で御座いますと怨みつ泣きつ口説き立て思はず母の膝の上上手をついて揺ぶりました母は倒々自若ものですから(母)成程お前は屋敷奉公をしただけに理屈をいふ縁が切れても血統は切れぬそれを私が手引きをして仇を討たなければお前は主人飯島様の家を立てる事が出来ぬから其云譯は斯うしてするど膝の下にある懐剣を抜くより早く咽喉へガパッツと突き立てました孝助は喫驚し懐て廻り付き(孝)お母様何故御自害なさいましたか母様ア〜〜と力に任か







て喚びます氣丈も母ですから懐劍を拭いて溢れ落る血を拭つてホツ／＼とつく息も絶へ／＼になり而色土氣色に變じ息を絶つ計り(母)孝助／＼縁は切れてもホツ／＼血統は切れんといふ道理に迫り素より私は兩人を逃がせば死ぬ覺悟ホツ／＼江戸で白翁堂に相て貰つた時お前は死相が出たから死ぬと云われたが實の人相の名人といふ先生の云れた事が今思ひ當りましたホツ／＼再縁した家の娘がお前の主人を殺すと云ふは實にあんたる悪縁かサア私は死んで往く身今息を留めれば此世にない身体ホツ／＼幽霊が云ふと思へば五郎三郎に義理はありますまいお國源次郎の逃げて往た道だけを教へてやるから能く聞けよと云ひながら孝助の手を取て膝に引寄る孝助は思わすも大聲を出して情ないよと云ふ聲が聞へたから五郎三郎は何事かと來て障子を刃けて見れば此始末五郎三郎は素より正直者だから母の側に縫り付き(五)母上様／＼それだから私が申ささい事ではありません孝助様後で御挨拶を致します私はお國の兄で十三の時から御恩になり暖簾を分けて戴いたも母上様の御蔭悪人のお國に義理を立て何故御自害をなさいましたと云ふ聲が耳に通じたか母は五郎三郎の顔を

トつと見詰め苦しい息をつさながら(母)五郎三郎お前は幼稚時から正當な人でお前には似合をい彼のお國なれども義理に對しお位牌に對し私が逃がしました又孝助に義理の立たんといふは血統のものが恩義を受けた主人の家が立たないといふ義理を思ひ自害をいたしたのでどうかお國源次郎の逃げ道を教てやりたいがホツ／＼必らずお前怨んでお呉れでないよ(五)イ、エ怨む所ではありません尊母お煩悶から私が申ませう孝助様お聞きなさい宇都の宮の宿外れに慈光寺といふ寺がありますから其寺を抜けて右へ往くと八幡山それから十郎ヶ峯から鹿沼へ出まそから貴君お早くおいでなさいナアニ女の足ですから澤山は往きまよまいから早く國と源次郎の首を二ツ取て母上様のお目の見へる内に御覽にお入なさい早く／＼と云から孝助は泣きながら(孝)ハイ／＼母上様五郎三郎さんがお國と源次郎の逃げた道を教へて呉れましたから遠く逃げんうちに跡追かけ兩人の首級を討てお目に掛けますといふ聲漸く耳に通じ(母)ホツ／＼勇ましい其辭どうか早く仇を討て御主人様のお家を再興て立派な人に成て呉れホツ／＼五郎三郎殿此の孝助は外に兄弟もない身の上又五郎三郎



殿も獨子種だからこれで仇は仇としてこれからはどうか寶の兄弟と思ひ互ひに力に  
なり合て私の菩提を頼みますヨウ〜と云ひながら孝助と五郎三郎の手を取て引  
寄ますから兩人は泣く〜介抱するうちに次第々に聲も細り苦き聲で(母)ホツ〜  
早く往かんか〜と云て血のある懐劍を引き抜いてサア源次郎お國は此の懐劍で止  
を刺せと云ひたいが最う云へない孝助は懐劍を受取り血を拭ひ仇を討て立歸り母上  
機に御覽に入りたいが此分では之れがお顔の見納めだらうと心の中で念佛を唱へ  
(孝)五郎三郎さんどうか何分願ひますと出掛けては見たが今母上が最後の際だから  
往き切れまいで又歸つて來ますと氣丈な母ですから血だらけで這出しながら虫の息  
で(母)早く往かんか〜と云ふから孝助は〜い往きますと後に心は残りませが仇を  
逃がしては一大事と思ひ跡を追て往きました先刻から之れを立聞きして居た龜藏は  
ワリヤこそと思ひ孝助より先きへ驅けぬけてトツ〜と驅けて往きまして(龜)源次  
郎私今立聞きして居たら孝助の阿母が咽喉を突てお前さん方の遁げた道を孝助に  
教へたからこゝへ追欠けて來るに違へぬ〜からお前さんは此の石橋の下へ抜刀の姿

で隠れて居て孝助が石橋を一つ渡た所で私共が孝助に銃器を向けますからそうと  
と跡へ下る所を後から突然に斬ておしまひなさい(源)ウツ宜しい失錯ちやアいけな  
いよと源次郎は石橋の下へ忍び抜刀を持って待ち構へ外の者は十郎が峯の向の雜木山  
へ登て銃砲を持って居る所へ斯とは知す孝助は息をもつかず追掛て來て石橋迄來  
て渡り掛ると(龜)待孝助と云から孝助が見ると銃砲を持って居るやうだから(孝)火繩  
を持って何者だと向ふを見ますと(龜)嘩の龜藏が(龜)ヤイ孝助我を忘れたか牛込に居た  
龜藏だ能く我を酷ひ目にあはせな手前が源様の跡を追かけて來たら殺さうと思つ  
て待て居るのだ(相)イエー孝助手前のお蔭で屋敷を這出されて盜賊をとするやうに成  
た今此處で銃砲で打ち殺すんだからさう思へと云へばお國も銃砲を向けて(國)孝助  
サア迎も逃げられぬ〜から打たれて死んでしまやアがれ孝助は後へ下て刀を引き抜  
きながら聲張り上て(孝)卑怯だ源次郎下人や女を越へ出して雜木山に隠れて居るか  
手前も立派な武士じやアないか卑怯だこいふ聲が深更だからヒーンと響きます源次  
郎は孝助の後ろから逃げたら討たうと思つて居ますから孝助は進めば銃砲で討たれ







孝助 勇を  
振ふ 恩を  
人の 仇を  
復す





をつたな主人の敵執の敵なぶり殺志にするから左様心得ろとこれから小刀を抜きま  
 して(孝)手前のやうな悪人に旦那様が欺されてお出なすつたかと思ふかと思ひなが  
 ら顔を縦横ズタ／＼に切りまして又源次郎に向ひ(孝)ヤイ源次郎此口で悪口を云た  
 かど之れも同じくズタ／＼に切りまして又母の懐剣で留めを刺して兩人の首級を斬  
 り髻を持たが首級といふものは重いもので孝助は敵を討てもうこれでよいと思ふと  
 心に緩みが出て尻もちをついて(孝)ア、難有日頃信心とる八幡築土明神のお庇をも  
 ちまして首尾能く敵を討ちおうせましたと拜みをしてトレ往ふと立上ると人殺／＼  
 と云ふ聲がとるから振り向くと龜藏と相助の兩人が眼が眩んでるから知らずに孝助  
 の方へ逃げて来るから此奴も敵の片別れと兩人ども斬り殺して二ツの首級を下げて  
 ヒヨロ／＼と宇都の宮へ歸つて来ますと往來の者は驚きました生首級を二ツ持て通  
 るのだから驚きます中には殿様へ訴へる者もわりました孝助は直ぐに五郎三郎の所  
 へ往て敵を討た次第を述べ殊に母がまだ目が見へますかと思われ五郎三郎は妹の直  
 級を見て胸塞がり物も云へまい母上様は先程息が切れましたと云ふから此の儘では

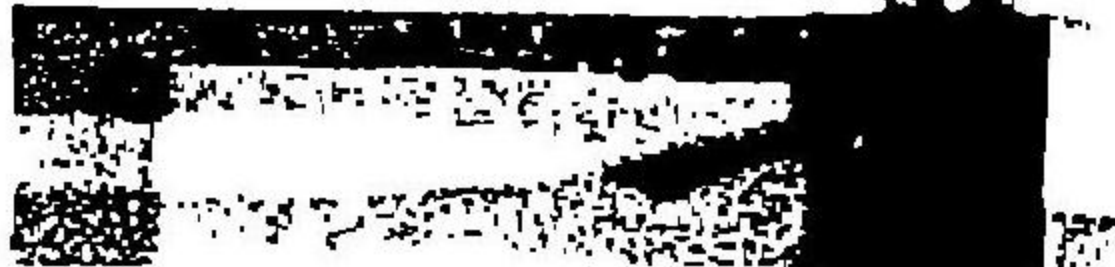
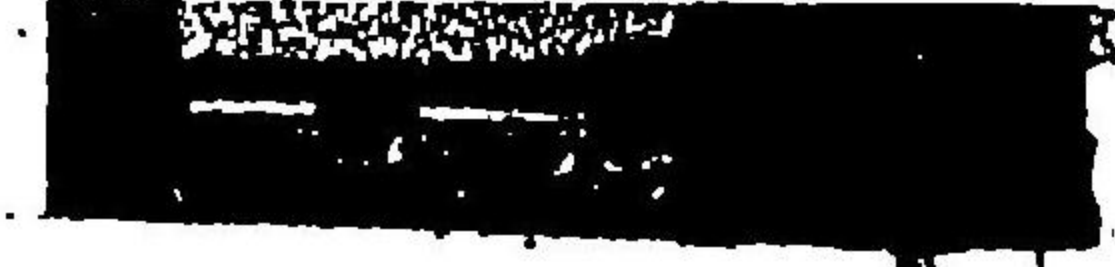


自十編画風音歌川











旅人宿  
東京神田區  
大森  
大森

五

八







097917-000-0

913.6-Sa632k-W

怪談牡丹灯籠

若林 坤蔵 筆記

1886